

杏林

第17号

JEC



2004

滝本道生前学部長追悼号

在りし日の滝本道生先生（写真）	3
弔 辞	本学理事長 松田 博青 4
故滝本道生氏の霊に捧ぐ	外国語学部教授 國松 昭 6
滝本道生さんを送ることば	毎日新聞社外信部長 中井 良則 8
滝本先生の思い出	外国語学部長 鳥尾 克二 11
滝本前外国語学部長を偲ぶ	元外国語学部客員教授 椎名 和男 12
熱き信念の人、滝本先生	外国語学部非常勤講師 家永 光恵 14
滝本先生とメキシコと私	外国語学部卒業生 藤田 都 16
キャンパス風景（写真）	
就任所感	外国語学部長 鳥尾 克二 20
雑 感	杏会会長 早乙女 優 21
杏会総会	23
新任教員紹介	25
ゼミナール紹介	28
学生部長から	学生部委員長 金田一秀穂 58
クラブ・同好会一覧	60
教務委員会から	教務部委員長 赤井 孝雄 61
教職課程について	教職課程委員長 諏訪内敬司 63
入試実施委員会から	入試実施委員長 田中 茂彦 64
就職について	
.....キャリアサポートセンター副センター長	小山 三郎 65
外国語学部のホームページについて	
.....杏林学園ホームページ外国語学部委員	今泉 喜一 66
広報委員会より	広報委員長 今泉 喜一 67
国際交流センターより	
.....外国語学部国際交流センター委員	原田 範行 68
不思議な日本と出会ったのかもしれない	
.....外国語学部教授	小山 三郎 70
異文化の橋渡し	外国語学部日本語学科卒業生 八道 里実 73
古希を迎えて	外国語学部教授 國松 昭 76
雨中、古希をお迎えになった國松先生を詠む	
.....外国語学部教授	中村 信幸 77
平成16年度 外国語学部 学年暦	78
編集後記	
平成16年度卒業記念パーティのお知らせ	

JECの由来

「ジェック」と読み、外国語学部の発足時の日本語学科、英米語学科、中国語学科の英語名である Japanese、English、そして Chinese の各々の頭文字を発音し易く組み合わせたもの。それは、常に初心に立ち返り、教育と研究に全力を傾ける気持ちを意味する。



在りし日の滝本道生先生

弔 辞

理 事 長

松 田 博 青



杏林大学外国語学部長 滝
本道生教授は、去る四月二十
七日日本学付属病院において病
のため亡くなられました。六
十二歳の若さであります。

今、在りし日の先生を偲ぶ
時、学園の理事・学部長とし
てこれから華が咲かんとした
矢先に、病に抗しきれなかつ
た先生の無念の胸中は察する
に余りあります。

先生は大阪外国語大学とご
卒業後、毎日新聞社に入社さ
れ、平成九年四月杏林大学に
専任教授として赴任される迄
の間、記者を始め英文毎日の
局長理事として縦横無尽の活

躍をされました事は、私共も
よく知る処であります。

先生は、外国語学部学生部
長としても学生を暖かく指導
して下さり、更にそのお人柄
や幅広い人脈を通じて私共教
職員にも中南米各国への目を
開かせて下さった事を厚くお
礼申し上げます。

私共が自宅に数年間病氣治
療のために預かっておりまし
たペルーの少年を平成九年七
月母国に帰国させる折に、更
に平成十二年四月同国のカイ
エターノ大学及び平成十四年
四月メキシコ・モレロス州自
治大学との交流協定締結の折

にも、先生を中心に現地で楽しく過ごしたあの数日間が懐かしく思い出されます。

またメキシコのエチエベリア元大統領を平成十二年十月本学にお迎えして名誉博士号と贈呈——。

先生のゼミ学生がこれを機会に現地に留学出来ましたのも、先生が青春時代に同大統領のお宅に寄宿され、その後も親交を重ねられたお蔭であります。

本年四月、私共は先生の病を知りながら敢えて、外国語学部長の就任をお願い致しました。先生の「病を克服する」

と言う不屈の精神に杏林大学外国語学部の今後の命運を託したかったからであります。

今、読書家で努力家であった有為の人材を失った損失は、本学にとりましても計り知れない程大きく、先生への哀惜の念と寂しさは一入であります。

この世における人生は、成し遂げたかった多くの事が未完成のまま残る短くはかないものであります。それだけに共に語り、共に論じ、共に過ごした日々への想いが胸にこみ上げます。

今は只、肉体的苦痛から解

放された先生が、新たな永遠の生命と安らかな憩いの中で、今夫人を始めご家族の皆様を見守りつつ、私共が今後最も最善を尽くすために天上からお導き下さることを祈り、杏林学園理事会・教職員・学生と共に謹んで弔辞を捧げます。

平成十六年五月一日

学校法人杏林学園

理事長 松田博青

故滝本道生氏の霊に捧ぐ

外国語学部教授

國松 昭



滝本さん、ついこの前までは、かくも早き

別れの時が来ようなどと、夢にも思っており
ませんでした。貴方は私より七歳も若いので

す。それに、いかにもジャーナリストらしい

精気に満ち、豪快に飲み、食べておりました。

胃の手術の後にも間もなく回復し、大学にもそ

して酒の席にも鮮やかに復帰なさったではあ

りませんか。それが、きわめて最近になって

急速に体調を崩し、入学式の日に入院され、

結局そのままになってしまいました。病の進

行のあまりの速さに、私どもはただただ驚く

ばかりでした。

滝本さん、あるいは、貴方は無念の思いを

抱きつつ亡くなったのかもしれませんが。志を

遂げることなく、その手前で折れ倒れた自ら

に対して、中道で空しくなってしまうた自ら

の宿命に対しての無念の思いを思って、私は

そう思うのです。今にして思えば、すでに病

はある程度進行していたのかもしれませんが

が、藤井前学部長と私の三人で、何度か飲み

ながら話し合いました。結局、貴方は、激職

である学部長職を引き受けてくれました。貴

方の病に対する闘志をさらに燃えたてる意気

込みでの学部長職のお引受でした。むろん藤

井前学部長もそうでしょうが、私もある感動

をもって貴方の発言を全身をもって嬉しく受

け止めました。

また、たまたま貴方の学生部長の最終時期

に問題を起こした学生の処分についても、貴

方は声を振り絞るようにしてその対応を述べ

られ、処分の方向性を示されました。また、

貴方が学生部長におなりになったのと軌を一

にするかのようにして起こった、学内の種々

の問題に関しても、見事にその責めを果たさ

れました。

全ては思い出になってしまいました。あつ

という間に思い出になってしまいました。貴

方は私の一年後に杏林にいらっしやいました

が、「毎日新聞」からということを知り、私

の小学校からずっと一緒だった男や、外語大

学時代の学生たちが「毎日」におりましたので、貴方にそのことを聞いてみますと、当然ではありますがよくご存じでした。そんなこともあって、二人で飲む時は、そんな連中の話や、国際情勢についての蘊蓄をうかがったものでした。でも、何といっても思い出深いのは、藤井先生その他の方々と、貴方、そして貴方の愛してやまない奥様もご一緒にまいりました中国旅行です。中南米には強い貴方でしたが、中国は初めて、ということもあって、溢るる好奇心と探究の精神を見せてくれました。優れたジャーナリストとはこういうものかと教えていただいた感じでした。

さきほど「闘志」と申しましたが、貴方の「癌」に対する闘志は最後まで健在であったかと推察しております。それは同時に学部長職に対する闘志とまさに裏腹のものであったのではないのでしょうか。入学式の日には、その日に入院されたにも関わらず壇上にいらっしやいました。そして、学部長として八王子

校舎にいらっしやったのは、お亡くなりになったその日が初めてでした。学部長滝本道生は生きた姿を遂に八王子校舎に見せることはなかったのです。

貴方がジャーナリストとしての今までの体験や、それにもまして貴方の固有のものである正義感や、幅広いものの見方、それらを杏林大学外国語学部の深奥において、ついにかすことなく亡くなった貴方を、私は中道にして倒れた無念の思いと言いましたこと、貴方はよく分かってくださると思っております。

でも、最後の貴方のお顔を拝見し、その安らかな、微笑みすら感じさせるお顔を拝見し貴方はきっと無念の思いを乗り越えての安らかな最期を迎えたのではないかと教えていただいたと思います。貴方の無念さや健在なる闘志をもしつかりと優しく包み込む奥様やお子さまがたに見守られ、全ての無念さをこの世に残すことなく、安らかにお休みになった、

そう思わずにはいられないお顔でした。

滝本さん、安らかにお休みください。わが杏林外国語学部は、より若い方々が貴方の遺志を必ずや受けつぐでありましょう。そしてさらに、貴方のご家族は、聡明にして美しい奥様を中心にして、しっかりとのお子さまがたが、キリツとした精神となごやかな心をもってあなたのご家族への愛をこれからもずっと抱きしめていかれることでしょう。

滝本さん、安らかにお休みください。そして、間もなく私などもそちらにまいります。その時はこちら同様あちこち案内してください。重ねてやすらかにお休みください、と申し上げます。

二〇〇四年五月一日

杏林大学外国語学部の仲間である

國松 昭

滝本道生さんを 送ることば

毎日新聞社外信部長

中井良則



滝本さん、あまりに早い旅立ちに、取り残された私たちは呆然としています。

今年に入ってから何回か、毎日新聞に立ち寄られましたね。外信部の窓際のソファに腰を下ろし「どう、元気にやってるか」とにこやかに声をかけていただきました。病と戦い、克服して、元気に活躍なさっていると勝手に思っていました。

毎日新聞の縮刷版を社内めぐり、滝本さんが書かれた記事のいくつかをもう一度、読み直しました。一九六四年に入社されてから、一九九七年、英文毎日局長で退職されるまで三十三年間の長い記者人生ですから、残された記事の量も膨大です。少し長くなるかもしれませんが、記者としてのお仕事を後輩が振り返ることを許して下さい。

滝本さん、あなたは日本におけるラテンアメリカ報道の先駆者であり、また二十世紀後半の戦争を各地で取材した戦争記者でもあった。そういう印象を改めて持ちました。

特ダネは限りなくありますが、中でもその華々しさで滝本伝説第一号ともいえる記事は、「サハラ外人部隊」でしょう。一九六九年六月二十二日の朝刊社会面のトップを飾りました。当時のスペイン領サハラの砂漠に駐留するスペイン軍外人部隊に入隊させられた日本人青年二人を現地で探し当て、インタビューしたのです。入社わずか五年目の若手記者がスペイン語の語学力と行動力で発掘したスケールの大きなニュースでした。その行動力は一九七二年、毎日新聞が主催したスペインの画家ゴヤの展覧会で準備の中心メンバーとしてスペインを往復された時にも発揮されました。

一九七四年には待望の中南米支局をブラジル・サンパウロに開設されました。ところが、毎日新聞の経営悪化でサンパウロ支局は一年で閉鎖命令が出ました。ここで滝本さんがあきらめていけば、毎日新聞のいや日本の中南米報道は大きく遅れたことでしょう。し

かし、中南米ニュースの重要性を社内ですえ続け、一九八〇年、今度はメキシコ市に支局を開設されました。毎日新聞にとって初の中南米特派員でした。日本の新聞記者の中でも、現地に住んでスペイン語で直接取材する本格的なラテンアメリカ記者の最初の世代でもありました。

学生時代に留学されたメキシコで人脈をフルに生かした特派員活動が始まりました。一九八二年のフォークランド戦争ではアルゼンチン・ブエノスアイレスに長期間、出張されました。一九八〇年代は中米諸国で米ソ東西対立の代理戦争としてゲリラ戦争が燃え広がっていました。毎日新聞でたった一人の中南米特派員ですし、カバーする国は三十三か国もあります。現場への出張を繰り返し、奥様やお子さんから見れば「突然出かけて、いつ戻ってくるかわからない」ご主人、お父さんだったかもしれません。しかし、その記事やルポ、解説は毎日新聞に大きく掲載され、日

本人に中南米の激動をリアルに伝えたのです。

一九八四年のエルサルバドル取材では左翼ゲリラの解放区に潜入し、ゲリラ部隊の生の声を取材しました。毎日新聞社から一九八八年に出版した「中米ゲリラ戦争」という本の中で、このときの様子を書かれていますね。

政府軍の最前線基地の検問所で昼間、阻止され、夜になるのを待って、暗闇の中、車で検問所を突破し、解放区に向かって突っ走った、というのです。現場に入って、当事者に会わなければならないというジャーナリストの使命感を強く感じました。

一九八九年からのローマ支局長時代には一年の湾岸戦争がありました。イラクのフセイン政権がミサイルを打ち込んだイスラエルに長期間、出張されました。イラクが化学兵器を使う恐れがあるため、空襲警報のサイレンが鳴るたびにガスマスクをつけてイスラエル人と一緒に避難されたのは有名な話です。

そのとき書かれた「記者の目」の一部を読ませてください。一九九一年二月十三日付けです。

「今回の戦争で、ミサイル攻撃を受ける『現場』にいたということは、戦争の『情報』から最も遠いところに隔絶されていたということと同義語かもしれない。スカッド・ミサイルがどこに被害をもたらしたかなどという『事実』については、米国あるいは日本のTV視聴者の方が、私よりも早く、そして正確に知っていただろう。しかし、私が肌で感じたのがホンモノの戦争であり、恐怖であり、愚かしさである。その体験から、長期化、泥沼化への不吉な予感が強まってくる」

滝本さん、新聞記者の基本とは、ニュースの現場に行き、現地の人々と話し、現実を肌で感じることだ、と私は教えてもらいました。私たち、現役の記者にとって、戦火が広がるイラクや、いつどこで起こるかかわからないテロなど、取材と報道の難しさを痛感する

毎日が続きます。こういう時にこそ、滝本さんの「早く現場へ行け」「おい、しっかりせんかい」というひとことを聞きたかった。

滝本さん、ゆっくり休んでください。「滝本さんならこんな注文をつけるかな」とその声や表情を思い出しながら、滝本さんが開いた道をさらに広げ、固める決意です。

二〇〇四年五月一日

毎日新聞外信部長

中井 良則



滝本先生の思い出

外国語学部長

鳥尾 克二



いかめしい人。滝本先生の第一印象は近寄り難いタイプとして刻まれた記憶がありま
す。二つのできごとによってその印象は長く
は続きませんでした。ある会議で先生ご担当
科目の取り扱いに関し、強い口調で自説を述
べられました。剛にして直、ゆるがぬ客観・

意志の人。第一印象が広がり始めました。も
うひとつ、晩秋の夕刻キャンパスの坂の途中
でバス停に向われる先生を八王子駅までお送
りしたことがあります。車中で話はずみま
した。先生の在メキシコ特派員時代、海外赴
任先に先着する日系企業社員が着任後現地に
家族を迎えるに際し、家族の渡航支援サービ
スが必要との提言を関係先になさったそうで
す。私は企業人時代同種サービスの対企業マ
ーケティング強化も手がけておりましたの
で、お互い偶然共通の話題に辿り付きまし
た。公平な人。隠された温かみのある人。

その後一学科制に改正され、先生はEーコ
ースの責任者となりました。私もコース所

属の一員として報告や相談時に短くお目にか
かりましたが、時に自らおっしゃっていた「言
いたい事を言いたいように言う」先生の面目
に接するに従い、私の中では人間としての先
生との距離感がどんどん短くなっていきまし
た。

訃報が届き、先生がキャンパスに最後の別
れを告げて学部正面広場を去られた日と翌
日、現代日本社会特論を含む各講義に先立ち
学生諸君と共に黙祷をささげました。一つの
講義での黙祷直後、滝山街道にぶ厚い黒雲が
湧きグラウンド方向に移動して行きました。
一〇分後、激しい雷声と一陣の風が去り私は
一瞬講義を止めて教壇から空を仰ぎました。
電光影裏の瞬間が過ぎ予期せず先生の跡を
継ぐ今、先生の求めたであろう春風を私なり
に求めていきたいと考えています。

滝本前外国語学部長を偲ぶ

元外国語学部客員教授
元国際交流研究所長

椎名和男



ここに一冊のパスポートがある。一九七七年二月外務省発行の公用一次旅券である。当時国際交流基金の日本語課長であった、私は外務省と基金が派遣した、「中南米文化交流調査団」の一員として参加した。メキシコ、

ペルー、ブラジル、そしてアルゼンチン等への旅であったが、滝本道生さんとの出会いの旅でもあった。滝本さんは当時、毎日新聞随

一のラテンアメリカ通で、外信部員であったと記憶している。団長は当時の外務審議官、後の駐英大使、北村汎さん、団員にはラテンアメリカ研究家の増田東大教授や、慶応大学の十時教授等そうそうたる団員の中にあつて、ラテンアメリカを知るジャーナリストで、しかも若手の研究者である、滝本さんを知る旅でもあった。全員から「たきさん」の愛称で呼ばれ、しかも、大外大在学中、メキシコのエチエベリア元大統領（杏林大学名誉教授）のところに留学、（こ本人は押しかけ

留学と称していたが）、「たきさん」のメキシ

コ支局やサンパウロ特派員としての中南米全般にわたる、土地勘とその幅広い人脈は、約一ヶ月に渡るこの調査団の成果に大きく生かされた。

ペルーでは、天野博物館に当時お元気だった、ペルー考古学の恩人、天野芳太郎館長を訪ね天野館長は直々に展示品を我が子を愛しむ様に一つ一つ手に取って見せて下さった。

この時の訪問記が毎日新聞の文化欄に滝本特派員の名で載ったのだが、同時に掲載された写真は私が撮ったものだが、ところが滝本特派員撮影となっているではないか、後年これをネタに「たきさん」を度々脅かしたのも今となっては懐かしい思い出である。一九八九年にブラジルのサンパウロで開かれた、第三回「日本語シンポジウム」を企画し、私に基調講演の栄を与えて下さったのも「たきさん」である。

二〇〇〇年五月ペルーの医科系大学、カイエターノ・エレディア大学との学術交流協定

締結も「たきさん」が杏林大学教授として杏
林大学にいたからこそ出来た協定で、松田理
事長ご夫婦と長沢学長のお供で私も天野博物
館を再訪できたのも「たきさん」のお陰だと
思っている。杏林大学に大学院国際協力研究
科が設置される時、当時外語の教務部長だっ
た私は躊躇せず、当時毎日新聞「英文毎日編
集局長」の「たきさん」を中南米文化の現場
を知る研究者として理事長先生に推薦したの
である。今夏、ギリシャのアテネでオリンピ
ックが開催されたが、ローマオリンピックの
時の毎日新聞ローマ支局長は滝本道生さんで
あった。「たきさん」のご冥福を心から祈る。



熱き信念の人、 滝本先生

外国語学部 非常勤講師

家永光恵



自分の頭で考えなさい。常識にとらわれるな。人に頼つちやダメ。君はちよつと「教科書的」なところがあるな。じゃあ、君の主体性はどこにあるの？ もっと大人になりなさい。君なら出来る、やってごらん。好きなようにやればいい。大らかにやりなさい。人と比べるな。焦ったつてなるようにしかならないよ。出来ないことはいいから、自分の個性を生かしなさい。楽しくやりなさい。前向きにやりなさい……。

先生からいただいたこれらの言葉は、今では私の宝物です。滝本先生には毎日新聞社時代からいろいろなことを教えていただきました。細かいことはおっしゃらず、分かりやすく本質を突いた表現でいつでもこちらをハッとさせ、そして前に進む力を与えてくださる方でした。私だけではありません。滝本先生にチャンスを与えられ、今、それぞれの持ち場で頑張っている人間は、私の知る限りでも何人もいます。

先生は、個性派揃いの新聞社でも、ひときわ存在感の大きな方でした。ニコリともされないお顔から鋭い眼光を放ち、ただならぬオーラを漂わせて肩で風を切るように足早に歩かれるその姿は、まったく周囲を圧倒していました。それとは対照的に、時折見せられる爽やかな笑顔の何とも素敵なこと……。

先生のあの独特の魅力は、いったいどこから来ていたのでしょうか。それは意外性で行動力、そして自分の感覚に対する頑固なまでの信念だったと言えるかもしれません。決して常識には縛られないのに極めて常識的なところ。大真面目な方にもかかわらずびっくりするほどラテン的な時間感覚。どんなことも可能なのだという考え方。それらを総合して浮かび上がるのは、常に何が大事なのかを考えた上で、すべてを前向きに受け止めようとする強い信念と精神力だったように思います。先生はどこにいても、おかしいことはおかしいと言い、正しいと思うことはやり抜

き、困っている人の力になり、人を信じ、また人を育てる人だったのです。ちょっと大きいかもしれませんが、私は今でも、あそこまで真っ直ぐで広い心を持つ温かい人物には他に出会ったことがありません。

先生その姿勢は、杏林大学に來られてからもまったく変わることはありませんでした。当初、お一人で担当されていた外国語学部の「現代日本社会特論」で、レポートの整理をお手伝いしたことがあります。学生たちも私と同じように、あそこまでキツパリとした口調で面と向かって人に励まされた経験がなかったでしょう。レポートには一様に、「励まされた」「自信を与えてもらった」「考えさせられた」などと書かれていたのをよく覚えています。

ところで、先生のお葬式の日、サンパウロ日系社会の邦字紙『ニッケイ新聞 (Jornal do Nikkei)』の「樹海」というコラムに、先生の死を悼む文章が掲載されたのをご存知でし

ようか。そこには「……これだと一般には大
学教授のイメージが強く伝わるけれども、滝
本氏は毎日新聞の記者として活躍し七〇年代
の初めにサンパウロとメキシコ支局長の任に
あり、新聞界きつての南米通と言われた人物
である。日系社会にとっても忘れてはいけな
い名物記者として記憶したい」とありまし
た。また、コラムは先生が手がけられた一九
七八年、サンパウロでのブラジル移民七〇周
年の記念シンポジウムにも触れ、「……こう
したシンポの裏方を立派にやり遂げた滝本道
生氏の遺業を心に温めながら大切にしたい」
と結ばれています。先生、さすがです。やは
り先生のされてきたことは、どんなに離れて
いても、どんなに時間が経ってもこんなふう
な思いを人に抱かせるような、人間味溢れる
ものだったのですね。

その先生がもはやこの世にいらっしやらないとは、私は今でも信じられない気持ちです。どんなに不可能に思えることでも、緻密

な計算で軽やかに成し遂げて來られた方でし
たので、世間的には難しいといわれる病気で
も、きつと乗り越えられるのではないかと無
意識のうちに思い込んでいたのだと思いま
す。本当に先生は、最初から最後まで、強烈
な印象を残して風のように駆け抜けていつて
しまわれました。

しかしこれからは、ゼミ生をはじめ杏林大
学で先生が蒔いてこられたタネが、そここ
で、ひとつひとつ芽を吹いていくことでしょ
う。私は私で、かけがえのないご指導をいた
だいたことを誇りに思い、自分の道を歩いて
いこうと思います。先生、いろいろとありが
とうございました。心よりお礼を申し上げます。

滝本先生と メキシコと私

外国語学部卒業生

藤田 都



杏林大学を卒業してからはやいもので三年が経ち、学部での記憶はだんだん頭の片隅におかれつつありますが、滝本先生との思い出はいつまでも色褪せないだろうと思われます。考えれば考えるほど滝本先生という偉大な恩師を失った悲しみがこみあげてきます。学部・ゼミ等、数多くの思い出の中でも、先生とメキシコと私は切っても切り離せないものとなりました。

私が滝本先生に出会ったのは、大学二年生のときでした。滝本先生の地域圏研究（中南米）の講義を聞いた時、「私が学びたいものはこれだ！」と強く感じました。メキシコの歴史・文化に興味を持った私はそれからというもの、滝本先生が担当する授業はすべて履修しました。そして三年生になったときには滝本ゼミに入り、二年間滝本先生のご指導のもと中南米研究に力を注ぎました。

大学卒業後メキシコに一年間、国費留学することになったとき、誰よりも私を後押しし

てくれたのは滝本先生でした。と、いうのも先生も学生のときにメキシコに留学し勉強に励まれたそうです。滝本先生のホストファミリーであったエチエベリア元メキシコ大統領は、先生の勉学に対する情熱に感銘を受け、日墨交流計画という国費留学制度をつくり、以後現在まで三〇年以上、日本・メキシコ間で多くの学生がお互いの国を知るために学んでいます。私もこの日墨交流計画の学生としてメキシコに留学し、縁あってエチエベリア元メキシコ大統領の娘・マリアエステルさんのお宅にお世話になり、一年間楽しく充実した留学生活を送ることができました。それも、ひとえに滝本先生のエチエベリア家に対する気遣いや心遣いのおかげだと感謝しております。

私の留学中に滝本先生とメキシコでお会いする機会がありました。先生は私とマリアエステルさんがスペイン語で会話しているのを見て聞き、スペイン語が上達した私にたいへん驚

かれました。そして「藤田、頑張ってるな。」

と誉めてくださったのを今でも鮮明に覚えています。なんでもない一言が、私にとってはとても嬉しいものでした。学生時代、先生は決して誉めてくださることはありませんでした。それは言い換えれば、今現在の努力で満足するな、さらに努力せよということだったのかもしれない。人間は何かを達成するためには努力し続けることが大切だと思います。しかし、その努力を認めてくれる人も必要です。目標に向かって少しずつでも前進し、成功をつかみとるために努力するということを先生に教えていただきました。

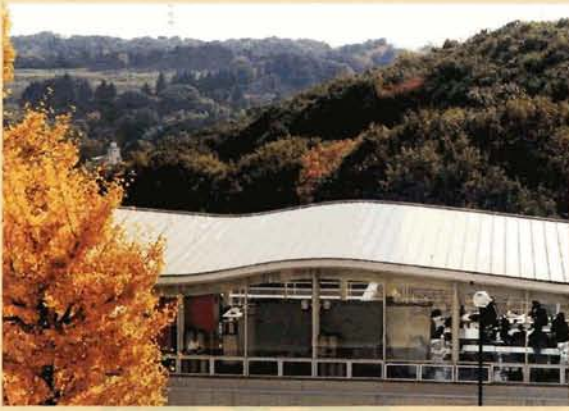
滝本先生と出会えたことは、私の人生において何よりの宝です。たとえ短い時間であったとしても先生との出会いはとても貴重なものでした。

これからも先生の教えを受け継ぎ、中南米に対する情熱を忘れずスペイン語上達にさらに努力を続け、日墨交流発展のために少しでも

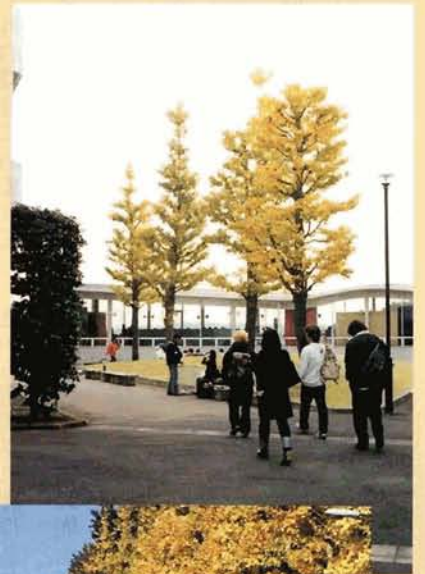
も力になれたらと考えています。







キャンパス 風景



就任所感

外国語学部長

鳥尾 克二



マスコミは受験生の大学全入時代、いわゆる二〇〇九年問題が二年前倒しされて二〇〇七年問題になると報じています。これは全大が既に根底的かつ不可避的な問題に直面してしまっており、当事者としての対応を目前に迫られていることを意味すると同時に、問題への対処速度を加速する必要があることの明確なシグナルを示しています。杏林大学に関しても他大学と同様に構造改革の必要性がいよいよ待ったなしであり、私達学部の自立的対応力がかつてなく求められている環境にあることは自明と存じます。大学教育は従来その独立性と自主性が社会に容認され、実社会からやや距離を置いて外的環境にあまり左右されない運営環境にあったがゆえに、ややもすれば社会的現実から遊離し内向きの論理のもとに存在してきたきらいなしとしないと考えます。私たちは、国を挙げての構造改革や少子化を始めとする昨今の社会現実を直視し、教育現場の変化への対応意志とリアリズ

ム感覚を持つことによってこの困難な時代を乗り切っていく覚悟が必要と考えます。日本社会は十年に亘る苦しい変化に取り組んできました。社会を離れて大学は存立し得ません。変化する社会が求める大学教育の成果は専門知識に裏打ちされた使える能力と資質を有する人材の生産に従来以上に収斂されていくと考えます。人材は専門知識として何を知っているかに加えて知っていることを何にどのように使えるかが求められることから、そのための教育を如何に設計・実施していくかが今後の学部の重要課題となっていくと考えます。教職員の皆さまとともに受験生や在学生から選択され獲得されるべき学部の付加価値生産とその質の向上に、あせらず、たゆまず自然体で取り組んでいきたいと念じています。



感 雑

杏会会長

優 乙女 早

一、はじめに（杏会の役割）

今年四年生になった娘と同じく、杏会の役員をお引き受けして四年目になりました。この機会に杏会の役割を自分なりに再認識してみました。

そもそも杏会は、大学の教育理念（「眞・善・美」）の実現を目的として、あらゆる方面からこの目的達成と教育効果の向上に資する活動を継続的に行ってきたわけですが、具体的には学生の「学問」・「国際交流」・「クラブ活動」・「就職活動」ほか、に対する期待や希望の実現のための支援を行ってきました。

現実には学生を中心に「企業」、「社会」、「両親」、「大学」がそれぞれインターフェースを持つ環境として存在していますが、杏会は特に「両親」と「大学」の両面から学生の期待や希望の実現のための支援を行うことが中心的な役割だと認識しています。

二、「眞・善・美」の教育理念

絶対のモノ（学問、人物、技、物、仕事、

時間）がいつもあって、到達するべくいつもそれに向かつて理想を追求し続ける、真理の追求といえるでしょう。

結局もつと良いモノがあると信じるからまた追求しようと思うのであって、その為には良いモノをよく見る事が不可欠です。

良いモノを見ていると悪いモノを見た時、直に分かるようになる、という話を良く聞きます。

中村雁次郎さんの紹介記事の中に、同様のことが載っていました。「雁次郎さんをおわいがってくれた人がすべて一流のモノに接させてくれた。能からいろんな芸以外に、食物や床屋も一流のところへ行けと。全部金を払ってくれた。」とのこと。

ちょっと違う世界のことではありますが、ある道を極めるためには程度の差はあれ、通じるところがあるのではないのでしょうか。

三、現場で学ぶ

モノを見たり作ったり触ったりする直接経

験で獲得する知識とか知覚というのは、物凄
い量です。それを分析的に言語で抽出する
ほんの一部になってしまうので、どうも最近

それがリアリティだと思ってしまう人が多く
て皆傍観者になってしまふ。そんなことに陥
らないようにしたいものです。映画のセリフ
で知る人も多いと思われませんが、まさに「事
件は現場で起こっている」だから現場で学ぶ
のです。

四、関係性で見る能力を身に付ける
現場を見るにしても、ある部分だけを見て
いてはだめで、全体を通してよいヒントを得
ようとする心がけが期待以上の価値を生み出
すことがあります。文脈を瞬時に読み取りな
がら最適な行動が取れるつまりいつも関係性
で見る能力というのはすごく重要です。

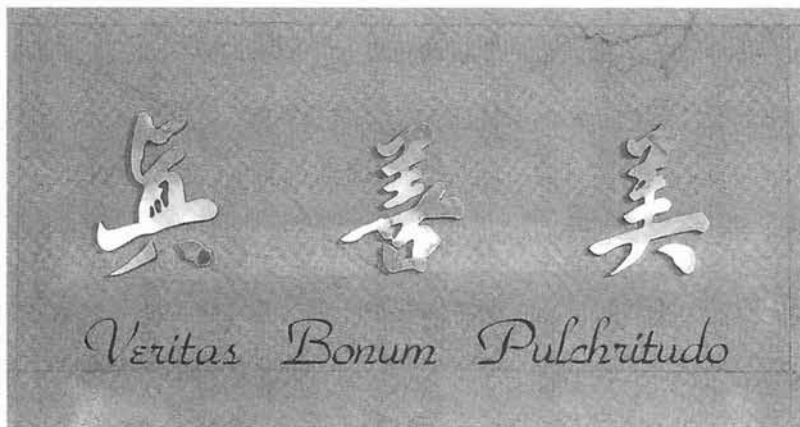
五、殻を広げる

関係の無いことにもたくさん興味を持つこ
とです。「真・善・美」は、いろいろなコン
テキストに触れて、想像しながら求めて行か

ないと、安っぽいものになるかも知れませ
ん。殻を広げないと、良いモノは出来ないの
です。

六、「楊震の四知」を信条に

最近消費者を欺く企業がマスコミを賑わし
ています。組織や仕組みも大事ですが、社会
活動の全ての基盤が信頼関係である以上、自
身の信条として何をするにも忘れないでいた
いものです。「楊震の四知」＝「天知る、地
知る、子知る、我知る」（十八史略より）不
誠実なことは知れ渡るといふ戒め。



杏 会 総 会

梅雨入り前の好天に恵まれた平成16年6月5日（土曜日）午後1時から、本年度は杏会総会に加えて外国語学部・保健学部・総合政策学部合同の諸行事を外国語学部校舎E棟402教室で開催しました。

総会に先立ち、3学部合同諸行事として1. 学長からの大学近況報告、2. 講演「大学生活と5月病」（保健学部大瀧純一教授）、3. 就職報告会（キャリアサポートセンター）等を行いました。

長澤学長は、大学（八王子キャンパス）の現況報告として、①前年度の各種国家試験結果、②学生による授業評価実施結果、③キャンパス内の喫煙分煙実施、④語学教育システム見直し推進等について説明しました。

続いて、保健学部大瀧純一教授から「大学生活と5月病」をテーマに講演を頂きました。思春期の学生を子に持つ会員の皆様にとっても関心度の高いテーマでもあり、また、発症の多い時期とも相まって時流に応える有意義な講演となりました。

引き続き、キャリアサポートセンターの就職報告会では武田センター長・赤井室長が就職に対する姿勢、就職実績の詳報・動向等と併せ夢と希望の実現に向けては本センターを大いに活用されることをご父母からも進められたいとのアドバイスを含めた説明を行いました。

総会は平成15年度会長西角康彦氏の挨拶で開会し、西角会長が議長となり下記議案（第1号～第4号議案）が審議され、役員改選により平成16年度新会長に早乙女優氏が選出されました。後半の議事（第5号議案～第6号議案）は早乙女新会長が議長となり審議が行われました。いずれの議案も原案どおり承認されました。

更に総会終了後、学部説明会が開催され、藤井前学部長の挨拶並びに学部状況説明の後、赤井教務部長・原田学生部副委員長より、セメスター制度、学年暦、学生生活等の説明が行われました。

その後、ガーデン丘に場所を移し、3学部合同で懇親会パーティーが盛大に行われました。また、チアリーディング部の演技披露を始め、写真部・書道部などの作品展示も今回の行事に彩りを添えてくれました。（出席保護者103名）

《平成16年度外国語学部杏会総会議案》

1. 平成15年度事業報告
2. 平成15年度決算報告
3. 監査報告
4. 役員改選
5. 平成16年度事業計画案
6. 平成16年度予算案

《平成16年度外国語学部杏会役員》

役職名	氏名	入学年度
会長	早乙女 優	平成13年度
副会長	渡辺 豊	平成14年度
	伊藤博史	平成15年度
幹事	絹田辰雄	平成13年度
	内藤俊朗	平成14年度
	長尾隆志	平成15年度
	小溝茂雄	平成15年度
	森本忠義	平成16年度
	栗原由起美	平成16年度
監事	三井康秀	平成14年度
	藤田元也	平成16年度



新任教員紹介

黒田 有子



①担当 英語・ゼミナール・英語総合講座

②出身地 東京都

③経歴 東京大学大学院人文科学研究所修士課程
(米文学専攻)修了、同科博士課程単位取得退学。

④趣味・愛読書・その他 映画鑑賞。小旅行。建築物を観ること。写真を撮ること。永井荷風「断腸亭日乗」の日本語のリズムとテンポに魅力を感じます。

稲垣 大輔



①担当 英語、英語学特論、英語総合講座、ゼミナール

②出身地 愛知県

③経歴 筑波大学第一学群人文学類卒、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科(言語学専攻)単位取得退学、マサチューセッツ工科大学言語・哲学科客員研究員

④趣味・愛読書・その他 音楽・映画鑑賞。アウグスティヌス「告白」、バートランド・ラッセル「幸福論」「教育論」、ノーム・チョムスキー「知識と自由」。座右の銘は「単純だが圧倒的に強力な三つの情熱―愛情への欲求、知識の追求、人類の苦しみに対する耐え難いまでの同情―が私の生涯を支配してきた」(ラッセル)

豊田 ひろ子



①担当 英語、英語教育、バイリンガル教育

②出身地 茨城県

③経歴 上智大学外国語学部卒、上智大学大学院外国語学
研究科博士前期課程（応用言語学専攻）修了、トロント大
学大学院教育学研究科博士後期課程（言語教育学専攻）学
術博士号取得修了。

④趣味・愛読書・その他 音楽・映画鑑賞、フィットネス、
散歩。『The Blue Day Book』。現在0歳児の長男といつか
世界冒険旅行をするのが夢です。

長谷川 弘子



①担当 ドイツ語、文学

②出身地 東京都

③経歴 中央大学大学院文学研究科ドイツ文学専攻博士課
程単位取得退学（近代ドイツ文学専攻）後、杏林大学総合
政策学部・社会科学部で十年間ドイツ語を教えていまし
た。本年度より外国語学部に移籍となりました。

④趣味・愛読書・その他 趣味は読書です。今はゲーテの作
品を読み直しています。ゲーテは十八世紀後半に生まれた
文学者ですが、その作品の輝きは現在でも失われていませ
ん。特に七十歳を越えてから書かれたものには、深い味わ
いがあります。「今こそ老人文学としてのゲーテを再評価
するべき時では？」などと思っております。

千野 万里子



①担当 中国語

②出身地 東京都

③経歴 共立女子大学国際文化学部卒、共立女子大学大学院比較文化研究科修士課程（中国語学専攻）修了。

④趣味・愛読書・その他 映画・演劇鑑賞、散策。最近は中国語圏のドラマをよく観ます。



ゼミナール紹介



赤井ゼミナール

ヴィクトリア朝言語文化研究

岩崎 哲宏

赤井ゼミナールにおいて四年生は卒業論文作成に向けての個人指導を中心とした授業を受け、三年生は英語、英米研究について紹介されている英文テキストを使用しながらイギリスの言語文化について学んでいます。授業自体はそれほど早いペースでは進まず、休憩時間が必ず一度入るのでとても余裕を持って授業を受けられています。わからないことがあっても先生が親切、丁寧に教えてくれるのでとても授業に集中でき、ためになります。

春学期に普段あまり接することのない四年生も交えたコンパが行われたのですが、皆い人ばかりでとても楽しめた一日でした。これもこのゼミにおける一つのメリットだと思っています。

秋学期には English Studies の中の多くの研究分野から幾つかのトピックを選び、それについて深く勉強していく予定です。このゼミで、先生とゼミ生一緒にお互いを高めたいと思います。

伊藤ゼミナール

フィロロジー研究

武石 育子



伊藤ゼミナールでは、四年生は卒業論文の

完成に向けての指導を受け、ゼミ生による作

成段階の報告・発表を行いながら卒業論文を

仕上げていくことを中心とした授業をしてい

ます。私たち三年生は、T. A. Shippey の著

書 J. R. R. TOLKIEN AUTHOR OF THE

CENTURY をテキストとして授業をすすめて

います。分からない言葉を理解し、文全体の

意味を考えながら学んでいます。そして毎

回、一人の発表形式で授業を行っています。

人前で発表することは、誰もが苦手だと感じ

ていると思います。しかし、このゼミではこ

れらの授業による発表を通して、社会に出た

時に会社の中で、プレゼンテーションの機会

があったら、やりこなしていけるでしょう。

また、伊藤先生はファンタジー研究を御専

門とされていますが、まるで歩く資料図書館

のように、多くの知識を持っています。です

から、先生の話を聞いてからは様々な物に目
を向け、興味を抱くようになりました。私も
その中の一人です。

現在四年生が一人、三年生が二人と少人数
です。しかしその分一人一人、発言する機会
が多く、先生も私たちのことについて大変親
身になってくださることも、このゼミの良い
所だと思います。



稲垣ゼミナール

生成文法理論研究



福井 優

稲垣ゼミは、今年発足したばかりの真新しいゼミです。何から何まで初めてづくしなので手探り状態が続き大変でしたが、漸く慣れてきました。ゼミ生と先生の仲も良く、心地良い雰囲気勉強に励んでいます。

私たちが学んでいる内容は、言語学で有名なチョムスキー氏の提唱した生成文法理論を通して言語を研究することです。理論を学び、発表を行い、言語現象を説明できるようにすることを目標としています。今は四人のグループを作り、密に連携しあいながら、プレゼンやゼミの仕事をしています。また、稲垣ゼミは、TOEICにも力を入れています。

外国語学部の学生であるにもかかわらず、英語運用能力が低いのは、大学生活で何をしてきたのかと疑問に思われるでしょう。七三〇点を最初の目標とし、更なる上を目指せるように毎週、本ゼミとは別に、サブゼミを行い、

そこで問題演習をしています。

言語学の奥の深さを実感させられる、それが稲垣ゼミの醍醐味だと思います。



今泉ゼミナール

日本語文法研究



阿部 恵

今泉ゼミでは、日本語の文法や音声を研究しています。私たち日本人は、現状の日本語文法では説明のできない使い方や、誤っているとされる使い方を日常的にしています。そのようなものを含め、日本語のありさまを研究し、文法的に説明することを主な目的としています。十五名のゼミ生は、出身も中国・

韓国・日本・ロシアとさまざまで、まさに異文化コミュニケーションですが、共通して言えるのが、みな母語の文法をよく知らないという事です（笑）。今泉先生はとても研究熱心な方で、「中国語ではどうですか?」「韓国語でもこういう使い方はしますか?」と、しばしば学生を困らせます。特に留学生たちは、日本語の文法は日本人より知っているのに、比較対象である母語の文法がよくわからないですね。私たち日本人も同じで、英語の文法は知っているのに、日本語の文法を知

らないんです。このように、日本語が母語の学生とそうでない学生、お互いの立場から日本語の文法をみて、新しい発見をする。また、文化の違い、考え方の違いを理解していく。毎日が「目から鱗」の今泉ゼミです。



岩崎ゼミナール

ホスピタリティ・マネジメント研究



大木 裕美

杏林大学には「観光ゼミ」が二つあります。

その一つが岩崎公生ゼミナール（生ハムゼミ）です。ゼミの時間は、ゼミ生男女十五人が集まり、ホスピタリティ・マネジメントをテーマに話し合っています。ゼミ生一人一人の意見や岩崎先生の体験談などを聞く機会が多く、新たな発見をすることができます。とても充実した、貴重な時間です。

また、岩崎ゼミナールは行事も多く、研究室の外でも活動しています。六月の合宿では、ホスピタリティ産業のサービス品質について比較評価したものを発表したり、杏園祭に向けての話し合いを夜遅くまで続けました。その結果、次への目標を立てることができ、皆の親睦も自然と深まり、実りある合宿になりました。

現在は杏園祭で研究発表するため、全員が力を入れて取り組んでいます。観光に興味の

ある方はぜひ杏園祭に来て、私たちのゼミにお立寄り下さい。



2004年7月新宿舍宿



2004年6月あきるの市キャンプ場合宿

江戸ゼミナール

オセアニア地域圏研究



鈴木 百合

私達、江戸ゼミナールでは今、ハワイとニュージーランドについて探究しています。ゼミ生は全員で七名で、四年生が一人、三年生が六人という少人数で活動しています。うちのゼミの江戸先生は、小柄で気さくな先生です。物事をはっきり言ってくれるので、恐い時もありますが、私達にとってはためになっています。なのでゼミでは毎回、先生から多くの事を学びます。基本的には、ハワイやニュージーランドの歴史を読んで、それを自分の言葉でまとめて発表するんですが、日本語の文法の間違いや言い方がおかしいところなんかも直してもらっているので、このゼミで学ぶ事は、ハワイやニュージーランドの事だけではないのです。担当分野はというと、四年生の先輩と私も含め三年生の女性陣三人がハワイで、三年生の男性陣がニュージーランドをやっています。残念ながら、先輩とは一緒に授業をする事はないんですが、三年生のみんなと先生とは毎週楽しく授業をしています

す。そしてこの夏、ゼミ合宿では、長野県の八ヶ岳へ行き、沢山の心に残る思い出が出来ました。7人いるゼミ生のうち3人来れなくなってしまうのが残念なのですが、2泊3日の八ヶ岳は、鬼暑と呼ばれた東京の暑さとは違い、涼しくて過ごしやすい環境でした。1日目は、ペンションに着いたところで、近くの自然公園に散歩に行き、その後は、みっちり夕飯まで勉強会をしました。2日目はハイキングに行き、みんな山頂まで登りきった時は達成感に満ち溢れていました。登山の後には、ゆつくり温泉へ。その夜はバーベキュー・パーティと花火を楽しみました。3日目は、朝食後近くの森を散歩し、その後出発時間まで勉強会を続けました。

東京に戻ってきて、ゼミ合宿を振り返った時、すごく充実した2泊3日だったなと思いました。東京では味わえない事が体験出来たので、自分にとってとてもよい時間を過ごしたと思います。

これからも、ハワイとニュージーランドについて色々な事を学びながら、先生やみんなと楽しんでいきたいと思っています。

河原崎ゼミナール

日本語教授法研究



私は河原崎ゼミ生の韓国人留学生朴 貞玉です。うちのゼミを簡単にご紹介します。ゼミ生はみなで一〇人、そのうち外国人留学生が七人で日本人学生が三人です。なんと一〇人全てが女の子で研究室はいつもにぎやかな雰囲気です。全員女の子ということは何より嬉しがっている人は河原崎先生ご本人だと思います。なぜならば、うちの先生は私達に笑顔をやささないからなのです。いつもニコニコ、優しい笑顔で私達を迎えて下さるので私達もそんな先生のが大好きです。こんな愛情一杯な河原崎ゼミでは今度の夏休みの一

いたのは多分初めてだと言って良いくらい真剣に楽しむことが出来ました。帰りにはみんな桜なべをいただきました。みんな桜なべは初体験で、馬の肉と聞いて多少違和感があったそうでしたが、そのうちお代わりを連発、美味しいと絶賛しながら全部食べました。この日は江戸時代の文化体験と馬の肉体験で頭とお腹の満足さが均等になった気持ち良い日でもありました。

日、みんなで江戸時代の町へ行ってまいりました。そこはこころ通う人情の町深川を演出した深川江戸資料館でありました。深川江戸資料館は自然な装置や照明、それから生々しい音声など情緒豊かな江戸時代の町造りが出来ている所でした。留学生である私達が実感するのに最も適した所だったのでみな好奇心が沸き、今回ほど先生の説明を真面目に聞

金田一ゼミナール

日本語意味論研究



長林 佑弥

授業開始のチャイムが鳴り、和やかな雰囲気の中、発表者が金田一先生に促され、おもむろに教壇へ立ち、ブツブツと発表仕出すところからこのゼミは始まります。

私たち金田一ゼミナールの十期生は、日本人九人、留学生十三人という大人数（他のゼミの人数がどれくらいなのかはわかりませんが）で、日本語の意味の違いの面白さを感じたり、学んだり、考えたりしています。

意味の違いの面白さというのは、例えば、「疲れた」、「くたびれた」という言葉を辞書で調べてみても、どちらとも同じようなことが書いてあり、よくわからない。でも、私たちは日常でそれを何気なく使い分けているという事実のことです。

こういったことを、私たちは、様々な角度から考え、例文などを作ったりして論証し、毎回一人ずつ発表して、みんなでそれが正しいか否か、なんかへんじじゃないか、どうもそれは妙だ、などと意見を出し合いながらワイワイと授業は進んでいきます。

この十期生には留学生の方が十三人もいて、私たち九人の日本人は、いつも留学生のスゴさに驚かされ、刺激を受けています。

前述したように、日本語を母国語としている私たちですらなんだかわかりづらい内容をやっているのだから、留学生の方々の苦労は計り知れません。それなのに、私たちには思いもつかぬような発想があったり、ユーモアがあったりで、本当にスゴい。また、中国人の某氏は私に、

「長林サン、今度才酒飲ミニ行キマシヨ」
ヨ」と誘ってくれるくらいだから、酒の方もきつとスゴいでしょう。

そして、私たち二十三人の面倒をみてくれているのが、金田一秀穂先生です。発表者や、私たちの意見の矛盾しているところや間違えているところを、涼しい顔であやまらず指摘し、まとめてくれるのは流石（失礼）としか言えません。面白いことが好きで、ガンバリ過ぎることが嫌いで、生徒の名前と顔を覚えるのが苦手な、愉快な先生です。

授業終了のチャイムが近づき、名前と顔を覚えられない先生がブツブツと話をまとめ上げると、ゼミの時間は終わりを迎えます。

草場ゼミナール

日本語学研究



沈 薇薇

私たち草場ゼミナールは、三年生女子七名、男子五名の計十二名です。留学生が多いので、外国人としてとても優しく勉強ができる環境です。このゼミでは、言語学について文化、伝統、古典と現代文、音声、文法など幅広い研究をするので、自分で勉強する力が必要です。

私は、二年生のとき草場先生の「日本文学概論」を受講したのがきっかけで、草場ゼミを申し込みました。先生は「今から勉強はじめないと、三年生のとき、間に合わない」という遠見をして、二年生の時、ゼミの予備校みたいな「勉強会」を開きました。勉強会で、みんながお菓子を食べながら、日本の古典文学を読み始めました。

三年生からのゼミの本番で、先生は勉強会の時より、少し厳しくなったと感じました。今学期は日本語史を主として、日本語の起

源、変化を学びました。日本語の歴史の流れを見ると、先生のおっしゃった通り、「言語は、成長する」ということが分かりました。

このゼミは、年二回飲み会と合宿が行われます。去年の冬、みんなは囲炉裏を囲んで、焼き鳥を食べながら、先生の「御伽草紙」の話を楽しみました。今年の夏、みんなは静岡県で二泊三日の合宿して、日本の伝統文化を満喫しました。

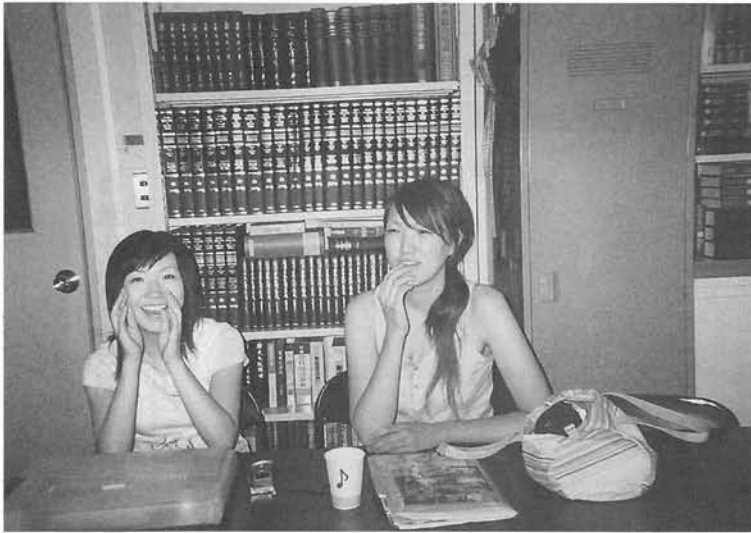
言語の研究は古い材料だけではない、新鮮な材料も大事だと先生が教えました。この教えに従い、私たちは対談番組を録画して、文字化します。これから、文字化した材料を計量言語学で分析します。

草場ゼミは古今を貫通する演習ですから、勉強になります。大変だけどとても楽しいです。

楠家ゼミナール

日欧文化交流研究

土門 佳樹



私たち楠家ゼミは男四人、女二十八人で構成されている、とても大きなゼミです。幕末に西欧に行った日本人の見聞録を読んでいます。

楠家先生はとても気さくで、たまにジョークをおっしゃる人で学生からはとても人気があります（たまに冷たい空気が流れる時もありますが）。そんな先生のおかげでいつもゼミは和気あいあいとした雰囲気なかで授業が進められています。

私が課題を調べてきたおり、分からない項目がありました。そんなとき、先生は私を研究室まで連れて行きました。怒られるのかなあ、ドキドキしていました。たくさんの本が並べられている本棚から参考文献を抜き取り、わからないことを詳しく説明していただきました。そのうえ、コピーまで取ってくれました。

いつもはジョークばかりおっしゃる先生で

すが、学生のことを考えてくださる、とても学生思いの先生だということをその時実感しました。こんな先生の下で授業を受けられることにとても感謝しています。

× × ×

秋学期に入り、編入生など新しい仲間も加し、現在では三十九名の学生がゼミのメンバーとなりました。テキストもイギリス人の日本学者B・H・チエンバレンの代表作『Things Japanese』を読んでいます。西欧人の日本観がいかなるもので、どういう背景でそれが生まれてくるか検討しています。

熊谷ゼミナール

日米比較社会問題研究



本橋祐江・堤 康輔・ 網中真珠美

熊谷ゼミナールが目標とすることは次の二つである。第一に、主専攻である英語能力の向上、そして第二に社会に出ても恥ずかしくない人間になる事、強みを持つ事である。

そして、これらの目標を達成する為に私達がゼミの中で行っている事は主に次の四つである。第一に「Taking Sides」というアメリカ

カの社会問題を取り上げたアメリカで出版された教科書（普通の日本人学生には難易度が極めて高い）を用い、読解力やディベート能力を身につける。毎週二十ページほどある一章を読破するが、春学期が終わるころには読解力が身についたことがわかる。事実ウェッブサイトの英文はスイスイ読めるようになる。第二に、春と夏に二回の合宿を行う。プレゼンテーションも行うがゼミ生同志の親交を深める機会である。また静岡市にある禪寺

で座禅、御法話といった日本の伝統文化にも触れることができる。第三に、PowerPointを使い英語で一時間のプレゼンテーションを行う。三次次は自分が選択したアメリカの社会問題、四次次は日本のそれについてである。

近年多くの学生は主専攻に対し、十分なレベルの知識を身に付けていない。私達外国語学部生でも満足に英語を使える学生はほんのわずかであろう。

熊谷ゼミはほかのゼミに比べて遥かに厳しく、きつい。その一つは授業内容。もう一つは授業やプレゼンテーション、卒業論文などの大半を英語で行うことである。その為失敗や恥ずかしい思いを数多く体験する。そして「余りにも自分の英語力の無さに」気付く。挫折する事もあるかもしれない。しかし苦労無しに成長する事はない。特に語学はそうである。このようなゼミだからこそ社会にでて誰にも負けない人間になる事ができる。

黒田ゼミナール

十九世紀・二十世紀アメリカ文化研究



吉岡 謙治

私たち黒田ゼミは、今年発足したゼミなので、黒田先生と学生とが協力し活動しています。私たちのゼミでは、主にアメリカの文化について学んでいます。現在は、アメリカの誕生と歴史などを学んでいます。それと同時に進行で、各自が就職に向けて英検の取得にも取り組んでいます。最終的な目標は、全員が準一級を取得する事です。授業の合間には、みんなでお茶を飲みながら雑談する事もあります。新ゼミなので、先輩もいなく、分からない事も多いですが、色々な事に積極的に参加したいと思っています。

私たちは、今年の杏園祭に屋台を出して参加します。それに、夏休みには発表会を兼ねて一泊二日の合宿を計画しています。そこでは、各自アメリカについて調べた事を発表し合います。

まだ環境に慣れていない部分もあります

が、協力し楽しく過ごして、大学生活を一層有意義なものにできたらと思います。



小山ゼミナール

現代アジア研究



小谷野知保

昨今、日本ではさまざまな国際問題に注目が集まっています。しかし、隣国の中国と台湾の関係、中国・台湾・日本の関係を知っている人は果たしてどのくらいいるのでしょうか。この台湾・中国の関係は、近年、緊張関係にあります。現在の日本では、この事についての理解は薄い状況です。私たちのゼミでは、東アジア研究、主に中国・台湾・日本について、各国家間の正しい相互理解を目指し、学習しています。

私たちのゼミは、留学生六名・日本人学生五名の全十一名、中国・台湾・日本人で構成されています。主な活動は、「中台関係論や日本論を読み、班毎に意見交換、発表」というものです。どの班も、留学生・日本人学生の班になっているので、班毎の意見交換の際には、三カ国それぞれの違った意見が飛び交います。ゼミ生同士も仲がよく、ゼミの時間

以外でも、自国の文化や料理、人気の芸能人の話などで、盛り上がっています。

小山ゼミは、このような「国際色豊かな多国籍ゼミ」です。「これぞ、外国語学部の醍醐味という体験」が、このゼミにはあふれています。

（追記）私たちのゼミは、秋学期に新装開店します。日本人学生六名・中国人学生六名・台湾人学生四名・韓国人学生一名のメンバー構成となりました。秋学期のテーマは「日本論」になります。三十年前のベストセラー『日本人とユダヤ人』から読み始めます。

清水ゼミナール

日本語教授法研究



長谷川梨絵

このゼミナールの研究テーマは日本語教育と日本語教授法です。日本語の教育教材を使い、文法や語彙などの問題を探ります。そしてゼミナール生を生徒として実際に学習指導案を作成し、授業を行いながらそれぞれの單元ごとに教え方を検討します。日本語を一つの言語としてみることで日本人の学生にとって難しい部分もあるかもしれませんが、実践的であり、身に付くゼミナールだと思います。

ゼミナール生は十人で、そのうち日本人学生が三人、中国や韓国などの留学生が七人です。授業中にはお互いの指導上での間違いや欠点を指摘し合い、授業以外ではそれぞれの国のことやたわいも無い話をするなどして良い関係を築いています。担当の清水邦子先生はさばさばした先生で、間違いや欠点をうやむやにせず、その場ではつきりと指摘してく

れる先生です。日本語教師として目標になる先生だと思います。

このゼミナールは日本語教育に関心があり、特に将来日本語教師になることを目指している人には打って付けのゼミナールだと思います。



諏訪内ゼミナール

新渡戸稲造研究

福井 美希

昨今のサムライ・ブームの到来で、新渡戸稲造の著作「武士道」があつという間に世の中に広まり、愛読している人が増えてきた。

私達がゼミで学び始めたのはまだこんなに知られてはいなかったのですが、今では最も注目度の高い研究ではないだろうか。私達は今、武士道の原作文を解説つきで書いてある李登輝著作の「武士道・解題」を基に「武士道」について学んでいる。私は本物の「武士道」が読みにくく、明治時代の文章なので、恥ずかしながら「く解題」の方が明解で読みやすく好きである。しかしここに来ていろんな人が「武士道」を読んでいる。一つのものに固持せず、ただひたすら「吾、太平洋の橋とならん」の言葉を胸に文字通り、日本と外国の国際的な橋として貢献してきた稲造は、いまわしい第二次大戦を前にその人生を全うした人である。その稲造の生き方は、現代を生き

る人々の無い精神を持ち、またそれが共感と
なっていたのではないだろうか。



武士道

新渡戸稲造著

矢内原忠雄訳



「武士道はその表徴たる梅花と同じく、日本の土地に固有の花である。——こう読みおこした新渡戸（1862-1933）は以下、武士道の源流・特質、読者への感化を考慮し、武士道がいかにして日本の精神的土壌に開花結実したかを説き明かす。「太平洋の懸橋」たらんと志した人にふさわしく、その論議は常に世界的コンテクストの中で展開される。



青 118-1
岩波文庫

詹 満江ゼミナール

中国古典文学研究

小室 淳路



私たちの所属する詹ゼミナールは、自分の考えを自由に表現することができ、個人の意見を尊重し、きめ細やかな指導を受けられるゼミナールです。当ゼミナールは、中国古典詩、文学をベースに授業を進めていきます。一つの詩を当時の文化、風習、情景、詩人の心の内など、あらゆる視点から読解することで、物事を一面だけでなく、多方面から見る力を養えるゼミナールでもあります。

また、校外活動の一環として「神田・神保町学生街古本屋めぐり」を行います。大自然に囲まれた八王子キャンパスを飛び出して、神保町の古本屋街を歩きます。都市部で見慣れた風景の中にも未知の世界は広がっていて、その世界を探索して新しいことに気付ける活動です。以上のような活動を通じて、自分で考え、行動し、自分自身を高めていけるゼミナールです。



高木ゼミナール

西欧文化研究



高橋 里実

高木ゼミナールは、昨年出来たばかりの新しいゼミです。ゼミの研究室名は西欧文化研究となっていますが、実際は各個人ごとに興味のあるテーマについて研究しているという、他のゼミとは一味違うユニークな面を持ち合わせています。

ゼミ全体の研究テーマはないため、一人一人に与えられたプレッシャーは大きなものがありますが、自分の興味のあることについて研究しているので、慣れないことに苦勞しながらも新しい発見に喜びを感じながらリサーチを進めています。

他者に自分の意見を伝えることは困難を伴います。しかし、それゆえ自分の意見に対して反応が返ってきた時は満足感を得ることができます。このゼミではプレゼンテーションの能力を養うこと、また他者の意見に対しクリティカルに考える力を身に付けていきま

す。

社会に出れば多くのプレゼンテーションの機会に立ち会うことがあるでしょう。その時、このゼミで身に付けたことが大いに役立つと思います。



田中ゼミナール

英語及び一般音声学研究



田中ゼミ紹介執筆担当班

田中ゼミナールには四十名以上の学生が在

籍しています。生徒数が多いため、生徒同士で何かを語り合う機会は少ないのですが、先生の熱い指導の下、みんな楽しく、かつ真剣に取り組んでいます。とは言え、先生がとてもフレンドリーなので結構のびのびとしており、ゼミ生同士も仲良くなってきたこともあって、毎回ゼミに行くのが楽しみです。

気になるゼミの内容ですが、私たちは主に英語を基本とした音声学を研究しています。

例えば、先生が意味のない言葉の羅列を発音し、私たちはそれを音声記号で書き表したり、口の中の構造の図を描き、さまざまな音ごどのような仕組みで発音されるのかを勉強したり、また、英語と日本語の発音の違いや、さらには発音の仕方による話し手の感情の違いなども考えていきます。その他に、社会言語学的なアプローチから、発音等の違いにお

けるアメリカでの人種差別問題や、イギリスにおける階級・地域性の問題などにも目を向けています。

田中ゼミの特徴は、なんと言っても音声学を学びながら発音を矯正してもらえる点でしょう。実際に、毎回のゼミで少しずつ自分が上達していくのが自分でもよく分かります。

田中先生はとても面白くかなりマイペースな先生で、雑談も授業中にちらほら…そして、授業内容は一見難しく思えるのですが、私たちがわからないと言えば何度も色々な例を出して、とても丁寧に熱く教えてくれます。このゼミでは先生が生徒に勉強させる場ではなく、生徒自らが自主的に学んでいく場です。そして、つねに問題意識を持っていれば、どんな小さな音声の現象であっても、どこまでも掘り進んで行くことができ、そこに思いもよらぬ発見があるのだということを実感できるゼミです。

塚本ゼミナール

中国 文化 研究



菱木ちよみ

私達、塚本ゼミナールは四年生六名と三年生十三名の計十九名で活動しています。その内三名が現在留学中。四年生全員と三年生の半数が留学経験があり、韓国や中国からの留学生もいるという非常にインターナショナルなゼミナールです。

活動内容は卒業論文の作成で、「中国」という枠にとらわれず、個人の興味がある事柄について各自、作業を進めます。ゼミの時間に各自が調べたことを発表し、そこで意見交換をします。そのため、新たな疑問が生まれたり、違った視点で物事を見られたりと、毎回回りの多い時間になります。

また、杏園祭では中国語の劇をしました。中国人留学生にも協力をしてもらい、発音やイントネーションを正して、より中国人の発音に近づけるよう、全員で練習し、協力し合い当日は大成功を収めました。

このように、塚本ゼミナールは個人の個性を大切にしながらも、皆でひとつのものを創り上げられる調和のとれたゼミナールです。塚本先生のご指導は厳しいですが、自分が成長していく為に、また論文をより良く仕上げられる為、各自たゆまぬ努力をしています。これからも個性的で楽しいゼミを作り上げていき

たいです。

△留学中の学生からのたより(抜粋)▽

開学式では、生徒を代表して挨拶することになり、とても緊張しましたが、何とか無事に終えることができました。授業は、中級クラスです。はじめはあまり聞き取れなくて大変でしたが、今では先生の話すスピードにもなれてきました。クラスメイト達とも中国語で会話するしかないのです、休み時間は積極的に会話するようにしています。また、河北大で日本語を学んでいる学生と交流しながら勉強したりしています。

こっちに来て、中国人のアバウトさに驚きました。何事に関しても、結構いい加減です。最初は腹も立っていましたが、今はもう慣れて、逆に今自分が日本に帰ったらここでの習慣が自然に出てしまいそうでこわいです。そのアバウトさが逆に楽になるときもあるし、ここでの生活は気に入っているし、中国は好きです。中国の人は話すのが早くて怒られていような感じを受ける時もありますが、いい人たちはばかりです。汽車の切符売りの人に親切な人はいません。態度の悪さにびびくりしました。中国の人と接するのは本当に楽しいです。もっとこれからも中国のことを色々知っていききたいと思っています。

(阿部展子)

遠山ゼミナール

言語学 研究



外国語学科

第8セメスター

山岸 陽

遠山ゼミでは、和歌や俳句をひとりひとり

英訳し、皆で互いに検討したり、また、ヨー

ロッパの絵画を題材にして、それが描かれた

頃の時代背景や時代精神について各自調べ、

発表したりすることを通して、日本と欧米と

の文化や物の見方・考え方の違いを知り、そ

れらが言語の性質とどのような関係があるの

かを研究しています。それを土台にして、日

本語と英語の本質的な違いを学ぶことができ

るのです。これは、英語を真剣に学習する人

にとって大変重要で役に立つと、私は思っ

ています。

ゼミで学んでいる事は難しく、大変だと思

うこともあります。授業中は堅苦しい勉強

という雰囲気ではなく、遠山先生が自分の体

験談や面白い話題を例にとって、分かりやす

く説明して下さるので、終始、和やかな様子

です。だから、とても楽しくゼミに参加でき

ます。授業以外でも、飲み会や合宿で、先生を含め、みんな仲良く交流を持てるゼミだと感じています。

期待に胸を膨らませて入った大学。でも「何か違うなあ」と思っている人。そんな人達の胸を再び熱くさせてくれるのは、「遠山ゼミ」。これ以外には、ないでしょう。

豊田ゼミナール

英語教育研究

田中 裕美



春季は、六人のゼミ生で『第二言語習得とバイリンガル教育』という専門書を読みました。難解な本でしたが、三章ずつ分担し無我夢中で発表をしました。その甲斐あってか、レジメの作成や発表が上手くなったように思います。夏休みは、カナダ大使館で開かれたカナダ・ゼミナールに参加しました。杏園祭では、児童英語教育教材の展示と紹介、歌のショー、ゲームなどをしました。秋季は、ゼミ生が七人となり、英語教材の考案作成や、歌やゲームなどのアクティビティの練習など、より実践的な活動をするようになっていきます。

真剣に勉強に取り組み、互いに支え合い、笑い声が絶えない元気で楽しいゼミです。



鳥尾ゼミナール

インバウンドツーリズム研究

渡辺 可奈

私たちのゼミナールは杉本ゼミ長を筆頭に総勢二十二名のメンバーからなっています。

研究のテーマはインバウンドツーリズムです。まずは観光とは何か、という概念を知り、考えるために私たちは自然・歴史・人の班に分かれて議論しています。日本の観光価値を知り、観光の政策につなげるためです。先日は初の試みで、三・四年生合同の議論を行いました。お互いに良い刺激になり、また考えも深まりました。

そして、私たちはそのことを含めたうえで、外国人観光客がどうすれば日本に訪れてくれるかを考えます。インバウンドツーリズムは幅も広く奥も深いため難しいのですが、

やりがいがあり、自分の視野を広げ、深く考えることができます。

私たちのゼミナールのモットーは自主・自助・自発の3Jです。観光とともに、自身自身を発掘し、仲間と共に成長できるゼミです。私たちは教室の中だけでなく、ゼミ合宿や学園祭を通して観光について深めています。また、よく集まることが多いのもこのゼ

ミの特徴です。文字だけでなく、体験することによって学べることも多くあります。このゼミナールでの観光についての知識や体験を通して、研究ができます。

私たちと一緒に鳥尾ゼミナールのDNAを一緒に築き、新しく観光を研究してみませんか？



中村ゼミナール

禅家語録研究



中村先生のゼミナールでは、中国における
仏教の教えを禅家の惠能大師の『六祖壇経』

を読んで学んでいます。文章は中国語で書か
れているので、毎回それぞれが分担して訳し
てきて、それを授業内で発表し、内容に対し

て先生が部分的に詳しく補足します。基本的
にはある程度の中国語を訳すことができる能
力があればわかる内容なのですが、仏教の深
い内容に関する事柄について書かれている文
章なので、これまでに習った中国語の基礎知
識だけでは訳しきれないこともあります。し
かし仏教のことを知らなくても、先生が細か
く説明をしてくれるので理解することができ
ます。

それ以外にも、毎回授業の始めに中国茶を
入れて、飲みながら中国における仏教の存在
の変化や、現代の中国のことも話したりする
ので中国語の勉強はもちろん、中国について
多様な事柄を身につけていくことができま
す。又、他の授業ではやらない仏教という視

点から新しい中国について知ることができま
す。



長谷川ゼミナール

児童文学研究



長谷川ゼミでは、児童文学の代表作品を読んでいます。春学期は主に欧米の児童文学を読みました。皆で一緒に一つの作品を読んだり、担当者を決めて発表を行ったりしました。ゼミで印象的だったことは、「ファーブル昆虫記」が人気がなかったことでしょう。虫はダメというゼミ生ばかりでした。（担当教員は昆虫が好きです。）それから、なぜかグリム童話を読んだ後、結婚と経済力の関係について話し合いました。愛だけでは生きていけない？ 愛がなくてもお金があれば生きていける？ 『赤毛のアン』の主人公の結婚相手も話題になりました。ゼミの親睦会で、アンの結婚相手がギルバートでは余りにも芸がないと力説していたゼミ生もいました。秋学期には日本の児童文学を読む予定です。



原田ゼミナール

近代イギリス文化研究



割栢 健太

「イギリスが誇る最大の文化は文学である」という言葉があるように、イギリスにはシェイクスピアをはじめ、数多くの素晴らしい作家や詩人が誕生してきました。この原田ゼミナールでは、そんなイギリス文学を中心としながら、しかし決してそのみにとらわれず、様々な角度から近代イギリスの文化に触れていきます。

授業では、私たちはテキストをグループ毎に分担して要約し、毎回それをひとりずつプレゼンテーションしていきます。卒業論文のテーマも様々で、自分たちの興味にあわせて書くことができます。

また、原田ゼミナールにはメーリングリストがあつて、先輩や後輩とのコミュニケーションや情報交換、あと先生の大好きなコンパの連絡などが非常にとりやすくなっています。先生は本当に何でも知っていらつしやる

方なので、授業中でもお酒の席でも温帯がたえません。

さらに九月の下旬には個人の研究内容を発表する四泊五日の合宿もあります。そこで私たちは夏休み中に個々でリサーチしてきた研究内容の発表をします。合宿は春にもあり、コンパも頻繁に行われ、十月には杏園祭にも参加するなど、何かと一年を通じて充実しているこの原田ゼミナールで、私たちは今までよりいっそうの想像力と創造力を働かせて身の濃い卒業論文を書き上げられるようがんばっていききたいと思っています。



パロケッティゼミナール

英米大衆文化研究



若林 樹里

「英語で授業をしたい！」そういう気持ちでパロケッティゼミナールにはいった二十人の仲間は、このゼミナールで初めて出会ったのにも関わらず、すぐに意気投合し一致団結した仲間となりました。授業内では、英語のみの会話となり緊張する場面も多々ありますがメンバー同士が支え合い、とても和やかな授業になっています。ゼミナールの主テーマは「英米大衆文化論」。アメリカや日本の文化を主に勉強してきました。個人やグループになって興味のある文化を調べ、プレゼンをして授業内で発表します。他国文化を学ぶことと同時に英語を聞き取るうとする力、伝えようとする力、コミュニケーションをとろうとする力もこのプレゼンを通して身につけることができましたものです。パロケッティ先生は、私たちにわかるように丁寧に英語を話してくださいます。私たちは素晴らしい先生と

仲間に出会えたこのゼミナールにとっても感謝しています。



本田ゼミナール

異文化コミュニケーション研究

堀口 貴



「異文化理解」と「異文化間コミュニケーション」をメインテーマに、私たち本田ゼミでは、楽しいゲームなどを交えながら異文化を理解する上で大切なことを学んでいる。本田先生は少し厳しいのだが、先生のもとも面白いトークには誰もが引き込まれてしまう。また、他の文化を理解するということは自分の文化や、自分自身についても理解しなければならぬので自分を見つめなおすことにもつながり、とてもやりがいのあるゼミだ。

本田ゼミのメンバーは実に全体の三七パーセントが留学生。まさに異文化コミュニケーションについて学ぶ上では最高の条件と言えるだろう。また、日本語教師を目指している学生が多いことからか、それとも本田先生の魅力にひきつけられたのか、なんと二十三人中二十一人が女性という状況で、数少ない男であるわたしは、ゼミの時間になると、うれ

しいような苦しいような不思議な気分になる。多種多様な文化の人と接する日本語教師を志望する学生に本田ゼミは最もおすすめであるといえるだろう。



マクミランゼミナール

英 詩 研 究



堤 愛

私たちマクミランゼミナールは、現在三年生男子二名、女子六名の計八名です。人数が少ないため、ゼミの雰囲気は、毎回とても集中していて、理解を深めることが出来ます。

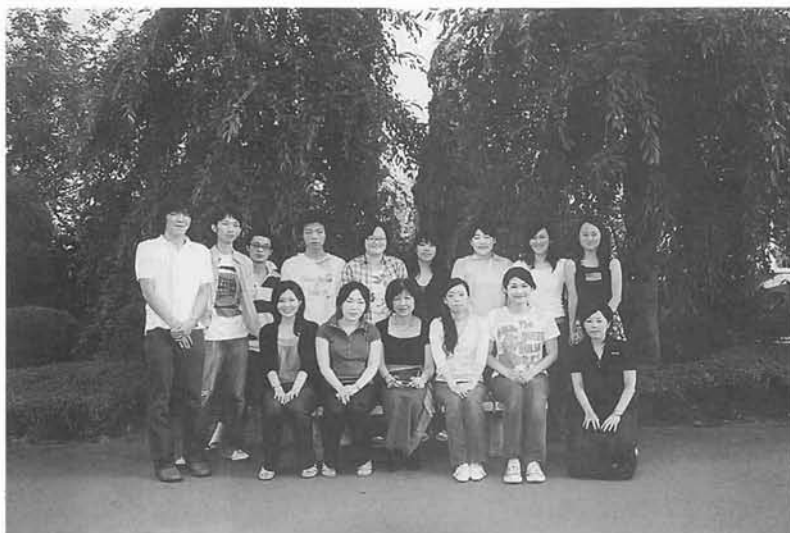
主に、イギリス、アイルランド、ポーランドの詩や詩人、またアートについて研究しています。ヨーロッパと日本では、精神の根本の部分から全く異なるので、英詩を研究し、そして理解する、このマクミランゼミナールの内容は、大変濃く、難しいです。しかし、マクミラン先生は私たちにヒントを与えて下さったりして、まず第一に、一人一人に考えさせてくれます。そして自分の思ったことをそれぞれが発表して、みんなの視野が広がり、独特な英詩の世界の理解が、なお一層深まります。マクミラン先生のお話は、大変興味深く、聴く者を惹きこむものがあります。

また六月か七月には、三・四年生合同の一

泊二日の山中湖への合宿もあり、全体を通して、とてもやりがいがあった、そして楽しい、良い雰囲気のゼミです。

吉村ゼミナール

現代アメリカ文学・文化研究



下田 真理

吉村ゼミナールは三年生八名、四年生十七名です。三年次の流れを簡単に説明します。

まず、presentation。テーマを、例えば、映画を一つ選んで、それについて自由に論じます。最初 handout の作り方、口頭で発表する際の注意まで先生から指導を受けます。発表が終わった後、今度はゼミの仲間から、暖かい励ましの言葉から辛口批評までいろいろなコメントをもらいます。

後期になるとアメリカの歴史に沿って、文化・社会等を再検討し、卒論に向けてテーマを考え始めます。そして決定したテーマが、Native American『The Catcher in the Rye』、台所文化、『チビ黒サンボ』、映画、音楽、『オズの魔法使い』、ケネディ暗殺等です。私の African American の裁判の問題を含め、全体的に African American を取り上げた論文が多いようです。現在就職活動、教育実習等忙

しいなか、英語の資料と取り組んでいるところ
ろです。

渡辺ゼミナール

現代アメリカ社会研究



樋渡 裕美

私達のゼミでは、主にアメリカについて研究をしています。私達が抱いているアメリカ像を徹底的に洗いなおし、現在アメリカが抱えているさまざまな問題を通して、アメリカとはいったいどんな国なのか、本来誰の国であるのかという疑問を投げかけ、われわれの抱くイメージと現実の対比を研究テーマとしています。

三年の前期は、日米関係にまだ暗い影をおとす太平洋戦争と原爆について話し合いました。戦争というテーマを通して、日本や中国から見たアメリカ、アメリカから見た日本と中国と、中国からの留学生も交えて、日米中それぞれの歴史教科書の記述の比較等、各々が文献やインターネットを使って、調査、発表を行いました。さまざまな見方、考え方、意見が飛び出し、毎回驚きの連続です。

毎週ゼミでは、活発な意見が飛び交い、激論を戦わしています。就職や将来のことも、とことん語りあいます。先生と学生が一体となつてとことん熱くなれる、ゼミの醍醐味ここにあり。渡辺ゼミはそんな場所です。



学生部長から

学生部長

金田一 秀穂



今年度から、思いもかけず、学生部長に就任しました。

外国語学部は、創設以来、十六年経ちました。創設以来のメンバーとして、この間の十六年は、またたくうちに過ぎていったような気がします。

そうした中で、いつのまにか、外国語学部の独自の雰囲気のようなものが形成されてきたように思えます。ひとつは国際性。もうひとつは自由というか、余裕というか、のんびりした明るい雰囲気です。

国際性については言うまでもないでしょう。学生のうち、二〇％は、外国人留学生です。この比率は、学部創設以来変化がありません。また、専任教師のほとんどは、日本語系も含めて、海外に長期に滞在した経験のある人ばかりです。日本の中だけで通用するわけではなく、自由に物事を発想し、実行する力を持った教師たちです。また、海外での日本人として、それなりの苦労を重ね、しっかりと暮らしてきて、成果を持ちかえってくることの出来た教師たちです。

自由な雰囲気というのも、そうした教師たちの気持ちや経験から生み出されてきているように思えます。学生たちに対して、寛容であり、同時に厳しく接する。このことは、一見矛盾するようですが、私たちは可能であると思います。それは、日本だけでなく、海外で

も通用する人間を育てたいという教師間で共有する考え方から生じています。

いたずらに、既成の枠の中にはめることは避けたいと思います。学生の考えを尊重し、いまの日本ではなく、将来の日本を見とおしながら、どのような人間がこれから大切なのか、という視点を大切にしたいと思います。したがって、学生たちには、のびのびと夢を語ってほしい、夢をつくってほしいと思います。それがどんなに奇想天外なことであっても、決して、「やめろ」とは言わない。「君なら出来るよ」と、いつも励まします。「自主規制」とか「なにかをする前に諦める」というようなことは、外国語学部から最も遠いところにある考え方です。

しかし、同時に自分に責任の取れる行動が出来ることも大切なことです。「自己責任」ということばが一時期はやりました。何かをして、人に迷惑をかけて、そのあと、「自分が悪かったです」と謝るのは、自己責任を取ったことになりません。人に迷惑をかけてしまうことは、人が生きていく限り、どんなにしても避けられないことです。迷惑を最小限に食い止めること、そしてなにより、最後まで、「自分のやったことは正しかった」と思えるような行動をとること。そのことを他人に説明出来ること。それが、自分のとった行動についての、正しい自己責任のあり方であると思えます。

世の中で生きていくことは厳しいことであると思えます。自由で、明るく、のびのびとしていられる時間は、大学生時代が最後なのではないでしょうか。その大切な時間を、学生たちには大切に過ごして欲しいと思います。それがどんなに貴重なものか、当事者に

はなかなか分かりにくいことですが、ある程度の経験をつんだ私たち教師には、痛いほどわかります。学生たちにはこの大切な四年間をぜひとも意義あるものにしてほしい。私たち教師、また学生部長として私も、できる限り努力したいと思います。ご父母の皆様のご協力をお願い致します。



平成16年度 クラブ・同好会一覧

クラブ

ク ラ ブ 名	顧	問	学 生 代 表	
情報メディア研究会	社・総	武 田 耕 一	総2	山 下 勇 樹
軽音楽部	外	長谷川 弘 子	総2	峯 島 厚
吹奏楽部	社・総	吉 竹 広 次	社3	見 次 憲
写真部	保	岸 邦 和	総2	平 原 千 歳
杏林書道会	外	中 村 信 幸	総2	三 井 雅 之
探訪部「ALK」	外	原 田 範 行	外2	佐 川 岬
柔道部	保	下 川 哲 徳	社3	谷 口 薫
男子バレーボール部	社・総	岩 崎 正 洋	保2	広 瀬 一 将
剣道部	社・総	遠 藤 健 哉	社3	福 澤 陽 介
ラグビーフットボール部	社・総	高 坂 宏 一	社3	金 澤 秀 明
硬式庭球部	社・総	新 田 敏	外2	丸 山 理
軟式野球部	社・総	西 孝	総2	山 内 浩 史
硬式野球部	社・総	内 藤 高 雄	社3	橋 本 佳 英
ベーシックスキー部	外	高 木 眞 佐 子	総2	大 野 優 太
サッカー部	社・総	青 木 健	外2	土 門 佳 樹
ソフトボール部	社・総	進 邦 徹 夫	外1	宮 本 明 仁
ハンドボール部	外	稲 垣 大 輔	社3	富 岡 禎
アメリカンフットボール部	社・総	田 中 信 弘	外3	横 瀬 敬 之
バドミントン部	社・総	阿久澤 利 明	外2	関 友 香 里
女子バレーボール部	保	田 村 高 志	総1	金 澤 絵 里
男子バスケットボール部	外	詹 満 江	総2	小松原 達 弘
端艇部	保	下 川 哲 徳	総2	本 郷 竜 也
ライフセービング部	外	田 中 茂 彦	保2	三升畑 奈 穂
チアリーディング部	外	渡 辺 光 恵	保2	楠 本 由 佳
少林寺拳法部	社・総	武 内 成	社3	財 部 謙 太 郎
自転車部	外	金田一 秀 穂	外2	樋 渡 裕 美
女子バスケットボール部	外	豊 田 ひろ子	総2	村 木 けいこ
フィールドアドベンチャー	外	本 田 弘 之	総2	吉 岡 裕 史

同好会

同 好 会 名	顧	問	学 生 代 表	
スピリッツ (バスケ)	外	楠 家 重 敏	総2	須 藤 健
トライアンフアルペンスキー部	社・総	原 田 奈々子	外2	内 田 智 美
WHITE FOX (軟式野球)	外	黒 田 有 子	総2	舘 岡 新
アスレチックサークル FEEL	社・総	笈 川 博 一	社3	羽 田 貴 一
Vorce	社・総	原 田 奈々子	保2	加 藤 良 一
ゴルフサークル	社・総	平 松 茂 雄	総2	小 俣 有 輔
テコンドー同好会	外	清 水 邦 子	外2	山 田 航 一 郎
Slave to the Rhythm	外	伊 藤 盡	外3	荻 原 恵 造
エンターテイメント研究会 G・A・M	社・総	渡 辺 剛	総1	河 合 大 輔
アートサークル	社・総	吉 竹 広 次	総2	稲 福 孝 俊

教務委員会から

教務委員長

赤井孝雄



外国語学部では、毎年春と秋に新入生を迎えています。その新入生が入学して最初に取り組まなければならないものに、自らの手で、自分だけの時間割を作るという作業（履修登録）があります。あらかじめ用意された時間割に従って授業を受けるのではなく、自分自身の興味・

そこで、授業が始まる前にオリエンテーション期間を数日設け、時間をかけて履修登録等についての教務ガイダンスを行っています。学生諸君の学業を支援する教務委員会や教務課の事務の皆さんと学生諸君との関わりがここから始まるのです。しかもこの関係は入学時だけでなく、進級、そして卒業に至るまで、また毎学期（セメスター）始めのガイダンスだけでなく、日々の学生生活の様々な面で続いてゆくこととなります。

在籍学期ごとに注意しなければならないことは数多くありますが、特に学年ごとに留意してほしいことを記しておきたいと思えます。

関心、あるいは自身の将来像を見据えて、自分だけの時間割を自由に編成するわけです。特に外国語学部では、学生諸君のより自由な、そしてより主体的な学習を可能にする教育課程（カリキュラム）を用意しています。もちろん自由といってもそこには幾つかの守らなければならない規則（学則・外国語学部履修規定等）があります。自由ばかりを拡大しすぎると無秩序になってしまうからです。つまり、大学卒業までに、秩序的な学習を可能にするための規則があり、それに基づいて自分自身の自由で主体的な時間割作りを行い、それを登録して初めて大学における学習がスタートするのです。

一年 先述したような履修登録から大学生活がスタートし、特に専門外国語（英語または中国語、ただし外国人留学生は日本語も可）と専門関連科目の学習が中心となります。特に、自分の専門とする外国語の習得に集中してほしいと考えています。

とはいえ、このような作業は、大半の新入生にとって、初めてのことで、とまどうことが多いのも事実です。入学時に配布される「ガイドブック」や「履修案内」、さらに学部のWebサイトにも掲載されている「履修モデル」などを参考に、自分自身の責任で履修登録ができれば理想的なのですが、現実にはそれだけでは不十分です。

二年 五つの専門科目群（情報・言語・文化、英語・英米研究、中国語・中国研究、日本語・日本研究、国際観光・国際関係・地域圏研究）の授業が本格化すると同時に、専門外国語以外の外国語、いわゆる第二外国語の学習がスタートします。また、三年から始まるゼミナールのための入ゼミナール試験が実施されます。これまでは、一学期に一単位以上修得すれば次の学期へ進級できましたが、三年（四学期から五学期）への進級条件は六十二単位以上となります。この条件を満たすような履修計画を立てることが必要です。

こと、とまどうことが多いのも事実です。入学時に配布される「ガイドブック」や「履修案内」、さらに学部のWebサイトにも掲載されている「履修モデル」などを参考に、自分自身の責任で履修登録ができれば理想的なのですが、現実にはそれだけでは不十分です。

三年

ゼミナールが始まり、専門教育が益々本格化します。大学生活の中で最も充実した一年ではないかと思えます。同時に、卒業後の進路についても考えなければなりません。そこで、「現代日本社会特論」という授業が必修授業となつています。また、課外ではありますが、キャリアアサポートセンター（就職支援室）のガイダンスや各種講座を受けて、遺漏のないように心がけてほしいものです。

四年

ゼミナールに於ける研究や卒業論文作成という、いわば大学生活を締めくくる学習が中心となります。しかし、就職活動や教育実習のために授業への出席がままならないこともあります。それを十分計算して、卒業に必要な一・二・四単位の修得、それ以外の卒業要件を満たす履修計画を立てることが必要です。

自由度が大きいぶん、個人個人によって履修形態が異なります。少しでも疑問があれば教務委員や教務課で確認をして、自分自身の自由で主体的な履修計画を作り上げてほしいと思えます。主体性・自主性こそ、語学修得そしてあらゆる学問の基本になるものだからです。



教職課程について

教職課程委員長

諏訪内 敬 司



教職課程は、日本の法律に基づいて設置・運営されている学校に、教員として勤務するために必要な教員免許取得の資格を与える課程です。本学部では、中学校と高校の一種免許状（英語、中国語、国語）取得の資格が得られるようになっていきます。

教員免許を取得するには、指定された科目の中から、専門教科の科目、教職科目及び教科又は教職に関する科目の修得が必要です。さらに基礎資格として、体育系科目、「日本国憲法」、外国語コミュニケーションと情報機器操作関係の科目も必要です（修得科目の詳細は教職課程ガイドブック参照）。

教職課程の中で最も重要なのは、教職科目のうちの「教育実習Ⅰ」Ⅲ」です。本学部では、中学高校に実習に行ける資格が厳しく設定されています。四学期次までの実習教科関連の語学の成績が一定水準以上であることと、英検、TOEFL、漢字検定等、各種の資格試験でも一定水準の成績を取っていることが条件となっています。特に、中学免許取得には教育実習が三〜四週間必要です（高校免許のみは二週間）。編入生が初めて教職課程を履修する場合は、履修科目数等の理由から次年度での教育実習はできません。

次に、中学校免許の申請をする際、指定の社会福祉施設と特殊教育諸学校で七日間の介護体験等をしたことの証明が必要です。詳細

は四学期次にガイダンス等で説明し、申し込みを受け付けます（五、六学期次に実施）。

以上のように、教育免許を取得するには負担が大きいため、課程を履修しようとするには、かなりの覚悟が求められます。実際に教員になることも、子ども数の減少によって狭き門になっています。新規教員採用者の四分の三は既卒者ですので、教員を目指すには、就職浪人がある程度覚悟しておく必要があります。ただ、文科省は主要教科では一クラスを半分に分けて授業してもよいとする方針を打ち出しており、中学では英語など一部教科の教員は増員されつつあります。また、数年後には教員が大量に定年を迎えるため、教員採用の前倒しが始まっています。教員を目指す場合、中学と高校の両方の教員免許をもっている方が有利です。

なお、ガイダンスや手続き等の案内はすべて掲示によって行いますので、掲示板の教職課程コーナー（共通掲示板内）を毎日必ず見る癖をつけるよう、ご子弟にお伝えください。教職課程では外部機関への手続きが多く、締め切り期限を過ぎたら一切受け付けられませんので、掲示を見落とさないよう注意してください。ガイダンスに欠席したり手続きの締め切りに間に合わなくて、介護等体験や教育実習ができない学生もいます。また、介護等体験や教育実習では外部機関に出掛けるので、身なり・服装、挨拶、言葉遣い、連絡・報告等について、社会常識を守るように厳しく指導しています。指導に従えない学生は杏林大学の学生として推薦できませんので、体験や実習には行けないことにしています。

入試実施委員会から

入試実施委員長

田中茂彦



七月二十五日に実施された秋学期入試をもって、平成十六年度の入試がすべて終了しました。しかし、ほっと息をつくのも束の間です。杏林大学入学センターは平成十七年度入試に向けて万全を期すべく、すでに準備を開始しています。入学試験の実施作業ばかりではなく、高等学校や予備校等への広報活動も入学センターの重要な業務なのです。杏林大学のすばらしい「中身」をより多くの受験生に知ってもらうためには、効果的かつ無駄のない広報活動を展開していかなければなりません。入試実施委員会は、できる限りこの活動をバックアップしていきます。

二〇〇一年四月に入学センターが八王子キャンパスに発足して早くも四年目を迎えました。センター発足以前の入試実施形態からの大きな変化にもようやく慣れ、実施業務も以前より円滑に進むようになったと言えます。現在では、すべての入試を総合政策学部と共同で行っており、さらにセンター試験では保健学部も加わって八王子キャンパスにある三学部が合同で実施作業を行っています。こうした学部間の枠を超えた協力体制によって、効率のよい入試実施作業が可能になりました。

来年度（平成十七年度）の入試は十一月の推薦入試に、来年一月のセンター入試、二月の一般A方式およびB方式、そして三月に行

われるC方式、それに七月の秋学期入試です。このうちA方式とB方式は、代々木、大宮、横浜、町田、および三鷹キャンパスの五箇所を会場とするサテライト方式で実施され、受験生が自宅から最もアクセスしやすい会場を選べるようになっていきます。現在、日本の大学が受験生を確保するためにさまざまな改革を行っています。カリキュラムの充実を図るのはもちろんのことですが、受験生の能力、資質、特徴に応じた、多様なニーズに応えられるバリエーション豊かな入試形態を実現させることも大変重要なことです。これに向けて、杏林大学の教職員は毎日努力を重ねています。

深刻な少子化による受験生減少によって、昨年度は約三割の四年制私立大学、そして四割の短期大学が定員割れを起こしたと報じられています。本学部への少子化の影響も否定できず、本年度の外国語学部受験者数は前年度に比べて約八パーセント減少しました。このような困難な時代に入試業務に携わるといえるのは、まさに「緊張」の一言に尽きると言っても過言ではありません。

杏林大学の詳しい入試情報は本学のホームページ (<http://www.kyorin-u.ac.jp/>) で御覧になれます。ぜひアクセスなさってみてください。そしてお気付きの点などございましたら、どうかお気軽に御意見をお寄せください。数年後に「大学全入時代」が到来するというのは避けることができない現実でありましょう。しかし、そんな時代になっても受験生にとって魅力的な大学であり続けるよう、入試実施委員会は入学センターを通じてできる限りの活動を行ってまいります。御父母の皆様には、今後とも御理解・御支援のほど、どうかよろしくお願い申し上げます。

就職について

キャリアサポートセンター副センター長

小山三郎



いま社会的問題になっているのは、「フリーター」志向の若者が増大していることであろう。このことは、大学で就職指導に関係している者にとって決して新しい現象ではない。キャリアサポートセンターでは、これまでずっと頭を痛めてきたことなのである。この問題は、いま高校の進路指導でも切実な現

実となつてゐるらしい。

なぜこのようなことがいま、発生しているのだろうか。世の中では、いろいろと分析されているがはっきりと回答がでてゐる訳でもないようだ。進路指導する立場にいる私たちにとって、どうしても理解できないことが一つある。それは学生諸君が大学受験する段階で、オープンキャンパスという機会に大学を訪問する、また教員が高校をなんらかの機会に訪問するとする。その時、高校生からでる質問は、大学卒業後の進路、つまり将来の人生設計のなかで大学がどのようなことを提供してくれるのか、という「真剣」な問いなのである。しかもこの問いかけは、少数の高校生からのものではなく、多くの高校生の声なのである。

その問いかけが、現実の大学生活に入ると、消滅するのであろうか。私は、ここで学生諸君の進路についてわからなくさせている理由がいくつあるのではないかと思う。一つは、進路の多様化である。これまでのような就職活動をおこなう学生のほか、留学を希望する、大学院に進学する、専門技術を習得するためさらに学校を選

択する、等々の選択が明確に生まれているのである。学生諸君がこのような選択をする時期がいつなのか、そしてその後の人生設計をどのように考えているのか。

このように考えてみると、大学の教員は学生の一人一人の姿を見失っているのではないかと考えざるを得なくなる。その時、キャリアサポートセンターは、どのような対応をとるべきなのか、を考えるのである。それは、学生諸君になにをどのような形で提供できるのか、という問題になる。学生諸君がなにを考えているのか、というこのような問題に直面している私たちは、学生諸君が幾つかの将来の選択肢を選ぶ時に、より詳細な情報を提供する必要性に迫られているはずである。

ここまでお読みいただいたご父母の方々に一つのお願がある。御子様は何気なく、「キャリアサポートセンターを利用してゐるの」と聞いてもらいたいのである。その時の回答で、おそらく御子様のいまの姿が見えると思う。私もキャリアサポートセンターでは、さまざまな課外講座、定期的なガイダンスを実施している。例えば、「秘書検定準一級」講座では、「会社とはなにか」、「社会人のためのマナー」等々の実践を含む知識が習得できる。こうした講座を通じて、学生諸君に社会との接点を結ばせ、自分の将来を考えさせている。一步一步の積み重ねから一人一人の学生を社会に送り出すことの大切さを実感することは、すべての基本である。学生諸君の進路にかかわる指導をおこなっている現在、ご家族の皆さまとともに学生諸君の進路に大きな関心を向けなければならぬと考えている。フリーター対策は、少なくとも現場では「即効薬」は存在せず、このような気持ちを持つことができるかどうか、の問題であるように思える。

外国語学部のホームページについて

杏林学園ホームページ外国語学部委員

今 泉 喜 一



外国語学部のホームページも新しくなります。

杏林学園では、これまで四学部・大学院三研究科・付属病院等がそれぞれ独自のホームページを展開していましたが、これらを統合する形で杏林学園全体の統一的なホームページを作成することになり、準備が進められ、この秋セメスターから公開されることになりました。

外国語学部のホームページで今回変更されるのは主として次のような点です。(1)シラバスの公開(以前は各科目についてセメスターごとの解説がついていました。)(2)全卒業論文題目の公開(すべてのゼミで公開することになりました。)(3)資格取得関連情報の掲載(4)教室・施設配置図の掲載(5)アクセスマップ・バス時刻表は学部として掲載しないことになりました。(実は、私自身、この文章を書いている時点では、変わる内容は分かっていますが、どのようなデザインで実現するのか等、細かなところまでは分かっていません。楽しみにしているところです。)

さて、ある調査報告によると、02年度にはホームページを持たない大学は皆無となったというので、今や、大学にホームページがあるのはあたりまえ、その中身が評価される時代になっています。インターネットの世帯普及率も六割を越え、高校生は自宅(や高校)から容易にさまざまな大学の情報を入手することができます。この

ような時代には、ホームページにどう取り組んでいるかという姿勢そのものが大学の評価を大きく左右することになります。しかもこの姿勢は容易に見てとることができるわけで、恐ろしい時代になったものだと思います。

しかし、ということは、逆に、ホームページに積極的に取り組み、情報公開をきちんとしていけば良い評価を受けやすくなった、やりがいのある時代になった、ということを意味しているともいえません。

情報を「公開する」といっても、出したい情報だけ出していけばよいというものではなく、高校生をはじめとする本学部について詳しく知りたいという人々や、在学生、卒業生、保護者の皆様それぞれが必要とする情報を発信していかねばなりません。また、社会におけるホームページの役割の今後の進展に合わせて、より価値のあるホームページを実現するために、発信者としての意識を新たなものにしていかねばなりません。

このようなかつてない新たな模索の状況に置かれていますので、保護者の皆様のご理解とご協力を仰ぎたいと存じます。ぜひ学部のホームページにご意見・ご提案をお寄せください。お待ちしております。

広報委員会より

広報委員長

今 泉 喜 一

時々大学構内でちよつと緊張した面持ちの高校生を見かけることがあります。友達どうしで、あるいは親御さんと一緒に外国語学部のキャンパスを見学に来てくれた高校生で、入学センターの係員が案内しています。また、高校でバスを仕立てて大学めぐりをすることもあり、そのような場合にはグループで見学をしてもらうこととなります。

大学の広報活動には、このように高校生に大学に来てもらって、構内を見、授業の様子、大学の雰囲気を知ってもらうタイプのものがあります。この大がかりなものがオープンキャンパスで、外国語学部の場合は七月と八月に一回ずつ開いています。学部説明や入試説明のほか、ミニ体験授業・先輩ガイダンスがあり、また教職員による個別相談コーナーも設けています。予備校の講師を招いての特別講演もあります。四五〇名ほどの高校生が参加してくれます。最近では高校の進学指導で大学の見学を奨励しているようで、高校の先生から勧められて参加したという高校生も多いようです。

これとは逆に、各地の高校に向向いていって外国語学部の教育内容を説明し、志願者を募るといった活動もあります。また、各地で開かれる進学説明会への参加もあります。

以上の広報活動は教職員の協力を得つつ、入学センターが中心になって行っています。

ところで、入学センターでは決して無尽蔵ではない予算を最大限に生かすために、より直接的な効果の得られるところに資金を投入するという原則を堅持しています。このため、たとえば京王線の車内広告に杏林大学が載っていないとか、新聞に杏林大学の広告が少

ないとかという現象が生じます。私などもちよつと寂しい思いをすることもありますが、これは大学の賢明な方針の表れなのだ、と考えることにしています。

また、ホームページの運営も広報活動の一つです。いまは、何ともあれまずインターネット、という時代で、杏林の外国語学部ってどんな学部なのか、ちよつと見てみよう、と気軽に調べられる時代です。ということは、ちよつとでも関心を持ってくれた人には確実に自己を開示することができるわけですから、この文明の利器の活用には積極的に取り組む必要があります。杏林学園では正面からこれに取り組む、この秋セメスターに全面的なホームページのリニューアルを行います。

ホームページでは、学部の真の姿を発信しなければなりませんから、より良い情報を発信するためには、学部の中身をより良いものにしていく必要があります。学生のみなさんが、入って本当に良かった、と思えるような大学にしていく必要があります。これには地道な、しかし強い意志に貫かれた努力が必要です。厳しいことです。これを怠れば、内外から大学としての評価を下げてしまいます。

広報の仕事というのは学部の努力のあり方と密接につながっているものであるということがお分かりいただけるかと思えます。学部が努力がなされればなされるほど、やりがいのある仕事になっていくのが広報の仕事です。

保護者の皆様には、広報の仕事がより楽しいものとなるよう、学部の努力にご声援をいただければ幸いです。

国際交流センターより

外国語学部国際交流センター委員

原田 範行



国際交流センターは、本学から海外へ留学・研修に出かける学生諸君と、海外から本学へ留学してくる学生諸君のそれぞれが、学習活動を円滑に進められるようさまざまな指導や援助を行う教職員の組織です。センターの運営には、外国語学部だけでなく、他の学部から選出された委員も加わっており、まさに杏林大学における国際交流の窓口と言えます。また、日本の大学への留学を希望する外国人留學生のために、その予備教育として日本語能力を育成する別科日本語研修課程を併設しています。

国際交流センターの窓口では、国際情勢の変化と学生諸君の留学希望の多様化に応じて、実にさまざまな対応を、柔軟かつ迅速に行うことが求められています。二〇〇一年九月、アメリカで発生したテロとその後の不安定な国際情勢、二〇〇三年中国で起きた、いわゆるSARSへの対応などはその顕著な例で、SARSが発生した昨年の場合、本学学生の安全を第一に考え、他大学に先がけて、海外研修を中止するという措置を講じました。ご父母の皆様にもご理解をいただければ幸いです。センターでは、こうした国際情勢の変化に対する危機管理や、学生諸君が留学中に遭遇する可能性のあるさまざまなトラブルに対する対応についても、万全を期すべく、必要な検討や研修を重ねております。また現在、八王子キャンパス

に学ぶ留学生数は、学部、大学院、別科など全てを合わせると三〇〇名に達しておりますが、こうした留学生諸君が、本学への留学をより充実したものにすべく支援もセンターで行っています。キャンパスが国際交流の舞台になる—そういうことを願って、外国人留學生と日本人学生との交流をさらに促進していくことも必要であると思われまます。

日本人学生諸君の海外への留学希望は実に多様化してきました。本学協定校との交換留学や派遣留学、イギリスや中国、シンガポールなどへの短期の海外研修のほか、学生諸君の興味や関心、研究分野に応じて、大学やそれに準じる研究・教育機関への私費認定留學生の希望も増えてきました。これは、留學中の勉學成果に応じて本学での単位認定を行う留學制度ですが、こうした留學先についての情報を広く収集し、アドヴァイスや支援をしていく体制をさらに充実させていく必要もあります。

昨年中止となった海外研修は、本年度、従来どおり実施することになっております。これは主として夏休みの期間を利用して、イギリス（オクスフォード）、中国（深圳職業技術學院）、シンガポール（シンガポール観光局）などで学生が研修を行い、研修を修了した者には所定の単位を認定するというものですが、合わせて六〇名以上の外国語学部の学生諸君が参加する予定です。引率教員の適切な指導の下に、充実した研修成果を上げられるよう、センターでも支援しております。

国際交流をより実りあるものにするためには、大胆にしてかつ細心の注意が必要かと思えます。海外への留學生、そして海外からの



留学生—みな、それぞれの状況の中で希望を持って留学生活を送っているわけですが、これらに対して細やかに、そして安全管理などの面では的確に対応していくことが大切です。その意味では、センターの支援体制をより緻密なものにしていく必要があるわけですが、それと同時に、学生諸君の若い力をバネに新たな国際交流のあり方を模索し、これを積極的に実現して行くことも、この国際交流センターの重要な役割と言えます。教職員一同、こうした二つのポイントをしっかり認識し、センターのさらなる充実を心がけてまいりますと考えております。ご父母の皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。



不思議な日本と 出会ったのかもしれない

小山三郎

「小山三郎」という自分の名前をしみじみと眺めることになったのは、わたしの台湾での体験である。同姓同名は、よくあることだ。

日本で直接会ったことはないけれど、かつて電話で問い合わせがあったこともある。「小山三郎さんですか」と。もちろんわたしとは別人だったし、気にもならないことだった。ところが、台湾で「小山三郎」という人物がかつて植民地時代に活躍していたことを知った時、「一体どんな人だろう」と猛烈に好奇心が湧いてきた。

その人は、鉄道技師で親子二代にわたって、植民地時代の台湾鉄道の建設に貢献があった人という。その人の父親は、台湾鉄道の建設の親として歴史に記されていた。そして「小山三郎」氏は、台湾各地に当時の日本人の鉄道建設への貢献を顕彰する石碑を建てていたのである。その石碑の最後に記された「小山三郎」という名前をはじめて見た時、その時代のその場に立ち、「あなたは、ここでな

にをしていたのですか」と聞いている自分の存在に気づいたのである。その石碑は、台湾第二の都市高雄を起点とする支線にある九曲堂という駅舎の脇にひっそりと建てられていた。

わたしは、昨年一年間、台北に滞在した。国立台湾師範大学歴史系の客員研究員として、台湾現代文学をテーマに研究していた。

もともと現代中国を研究対象としているわたしが台湾を選んだのは、台湾を通して大陸を観察する機会をいつか持ちたいと思っていたからである。そして「台湾は中国なのか、それとも台湾なのか」という単純とは言えない疑問をもっていたことも確かである。しかしその動機がどのようなものであれ、一年間の台湾経験は、誰もが体験するであろう日本との出会いが私を待ち受けていたのである。

それは、どんな出会いだったのか。日常生活のなかでは、こんなこともあった。蔓延していたSARSが突然消え去った頃、台北は

連日、三十五度を下らない猛暑の中にあつた。ちょうど台北滞在六ヶ月が過ぎようとした頃のことである。その時、突然道を聞かれるようになったのである。旅人がその土地の住人になったような顔つきに変化していたのかも知れない。道を聞かれること自体は、気に留めることでもない。しかし、わたしに道を聞く人たちは、台湾語を話し、ちょっと戸惑うわたしを見て、必ず「日本の方ですか」と日本語に切り替えるのである。台湾の「日本語人」の存在は、驚くことではない。しかし日常の中でこのことが繰り返されると「ここはどこ」という素朴な問いかけが浮かぶものである。しかもいつもの見慣れた街並みには老朽化してはいるが日本家屋が残り、日本人の誰もが傑作と認めるであろうかつての日本統治時代の建築物が静かに台北の風景となりきっていた。

わたしの日常生活は、特別なものではなかった。中国語を勉強し、図書館で資料を調べ、

研究室で過ごすという普通の生活であつた。とは言うものの、そのためには多くの人たちの支援があつたことは確かであり、呉文星文学院院长、そして大学院生との交流にはわたしの台湾認識を啓発するのに思いがけない意味もあつたことは確かである。呉文星教授は、中学校の教科書『認識台湾』を編纂したことでも日本でも有名な方である。植民地時代を研究テーマとしており、その大学院生は当然、日本統治時代のさまざまなテーマをそれぞれに掘り下げていた。

このような環境は、わたしにかつての日本に目を向けさせる契機となつたのである。しかし、わたしが出会つた日本は、懐かしいけど、なにかいまの日本人として、違和感のあるものなのである。そのかつての日本人が台湾の研究者によって発掘されているのを見ると、もう一つの「なぜ」という疑問が浮かんでくるのである。この瞬間、私は台湾研究の面白さに触れたのだと気づいたのである。

もう一つの日本の存在に気づいたのは、台湾総統選挙直後、つまりわたしの帰国前夜のことであつた。

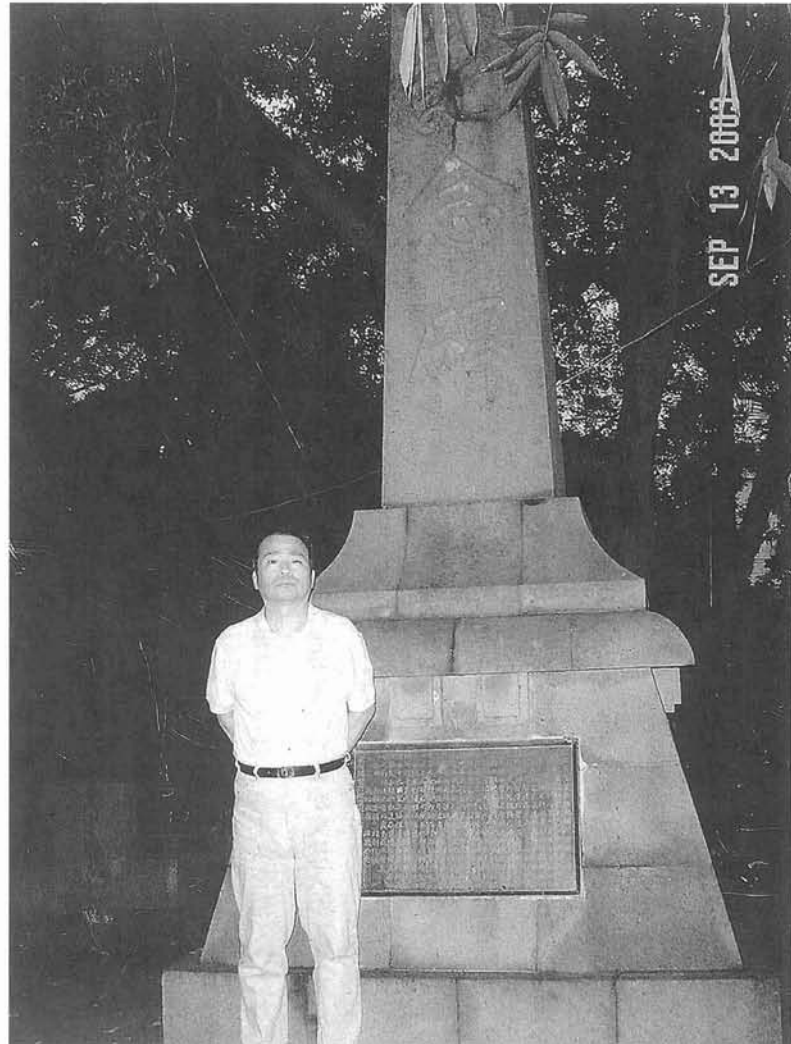
今年三月台湾総統選の数日後にこの選挙の無効を叫ぶ多くの人々が総統府前に連日、抗議をおこなつていた。この抗議は、数日後、近くの中正紀念堂に場所を移すことが決められ、その場にいた人たちは決して手荒くではなかつたものの警官隊によって、排除された。その翌日、そのニュースを見ていたわたしの耳に老婦人の言葉が突然入ってきた。「わたしの国の国旗を踏まないで」

この一言が、台湾の政治の複雑さを物語っていた。その複雑さは、日本植民地時代の象徴であつた総統府の建物を前にして、国民党を支持する人たちが排除される光景のなかにある。台湾本土化を目指す総統の再選は、大陸から国民党政府が移ってきた事実、台湾人が台湾の進む道に独自の選択をしようとして、いることを教えてくれた。そのなかでいま、

台湾人の研究者がかつての日本統治時代を掘り起こし、日本人の知らない日本が蘇ろうとしているのである。ここに日本と日本人が蘇っている不思議さがある。

この現象は、台湾の台湾本土化とかかわっているようである。台湾のなかに日本があった時期、国民党の時代、そして台湾が台湾を主張し始めている今、日本が蘇っているとしたら、この現象を日本人であるわたしはどう理解すべきであるのか。わたしはこの一年、この不思議な現象を考え、不思議な日本と出会ったのかも知れないと考えているのである。

追記 国立台湾師範大学歴史研究所博士課程の蔡龍保君が「推動時代的巨輪」という博士論文の一部となる学術書を刊行した。この本から台湾の日本人の姿が蘇っている。その後、その日本人たちはどうしたのだろうか。小山三郎技師の送別会の記事が昭和十三年の『台湾鉄道』に大きくとりあげられている。



(九曲堂駅舎脇にある 小山三郎技師の石碑)

いま、帰国後の小山技師の追跡調査を始めています。この時、わたしは一瞬息をのむ体験をしました。小山三郎技師、武蔵野国熊ヶ谷、埼玉県熊谷市生まれ。熊谷市は、わたし小山三郎の本籍地でもある。九曲堂駅舎脇の石碑を戦後訪れた人がいたのかはわからない。はじめて訪れた日本人が小山三郎であったとするとなんと奇妙な因縁ではないのか…

異文化の橋渡し

外国語学部日本語学科卒業生

八 道 里 実

八道里実さんは、一九九五年杏林大学外国

語学部日本語学科に入学し、学業と平行し

て、留学生へのボランティア活動をする一

方、一年次よりチアリーディング部に所属

し、三年次には主将を務め全国大会に出場し

ている。ボランティア活動を通じて海外で勉

強している留学生の精神的サポートができる

仕事につきたいという思いから、一九九九年

卒業後アメリカのシラキュース大学大学院に

入学、二〇〇二年卒業後、同大学キャリアコ

ンサルタントとして現在活躍中。その活躍ぶ

りが同大学の学内誌で紹介された。

△本原稿は、本学学内誌「あんず」二〇〇

四年六・七月号に掲載されたものの転載であ

る。▽

二、三〇〇人の留学生の多くにとって八道

里実（二〇〇二年大学院卒）は本当の友達で

ある。シラキュース大学キャリアサービスの

キャリアアコンサルタントである八道は、在学

生と卒業生にキャリアアデベロップメントから

就職活動に関わるまでのカウンセリングをし

ている。

「留学生は就職活動をする際により多くの

困難に出くわすことが多いです。」と教育学

部でカウンセリング教育の修士号を取った八

道は言う。「留学生たちは外国人というステ

ータスを保ちつつ、違う文化に適応してい

なくてはなりません。私たち、キャリアアカウ

ンセラーはそのあたりの問題を考慮しつつ、

進路選択を手伝っていくべきなのです。」

日本人である八道は東京にある杏林大学で

学部生をしていたときに留学生のカウンセリ

ングをすることに興味を持った。とても仲の

良かったスリランカからの留学生が入院した

ときに、彼女は留学生をサポートするリソー

スがあまりないことに気づいた。「その友達

はとてもホームシックであった上に、クラス

でも遅れをとっていました。私はもっと彼女

を助けてあげることができればよかったの

に、という思いをいつも抱いていました。」

と外国人に対する日本語教育を学んでいた八道は言う。「その友達に対して教授たちは質問の上でのサポートをすることができていたのは幸運ですが、それ以外に気持ちの面の（プロフェッショナルな人からの）サポートが欠けていました。」

学部生だったとき、八道は留学生に外国語としての日本語を教えるチューターをしていたこともある。「彼ら、彼女らと話していて、自分は（日本語を教えるより）直接ヘルピングをすることに興味があることに気づいたのです。（私が会ってきた）留学生たちは大変な時間と労力を外国での勉強と働くことに費やしています。（だからこそ、後悔しないために）彼ら、彼女らは目的意識のはっきりした進路決定をするためのサポートが必要なのです。」

八道はカウンセリングの専門知識を学ぶために渡米を決意した。「米国はとてもいろいろな文化を持った留学生が集まっています。」

（だから、米国を留学地に選んだ。）シラキウス大学を選んだのは自分の興味に一番沿ったカウンセリングのプログラムがあったからです。」

シラキウスでの留学経験は八道にとって良い経験であった。「留学生でいることによって人間的に強くなり、大人になり、そして自分から行動を起こしていく姿勢を学びました。今でもとてもはっきり覚えているのは英語で自分をうまく表現できずに、とてつもなくもどかしい思いをしたことです。でも、今は世界中から集まってくる人たちとの交流を存分に楽しんでいます。文化の違い、価値観の違いに直面するのはチャレンジでもあると同時に私を成長させてくれました。」

八道は自分の（留学生としての経験）をS Uの留学生と接するときによく使っている。コンピューターサイエンスを専攻したインドからの留学生タルン・カタリア（大学院二〇〇三年卒）は自分の就職活動における問

題点等を八道に対して打ち明けやすかったと話している。「キャリアアカウンセラーに話している、というより友達と話しているようにでした。」と言う。タルンが最初に八道に会ったのは三ヶ月に渡るうまくいかない就職活動のあとの八月のことである。「五〇〇通も応募書を送ったのに一社の面接にも呼ばれずにいて、とてもいらいらしていました。中でも有るコンピュータ会社が私のコミュニケーション能力が低いと言って自分の応募を却下したときはショックでした。」

八道はそんな彼に電話で企業側にフォローアップしたり、自分の声を録音しながら電話面接の練習をすることを勧めた。「それから、面接の依頼が来るようになったのです。」と語る。

就職活動において、文化の違いのために不利になってしまうことがあることをよく知っている八道はキャリアセンタ―での留学生に対するサービスの向上やプログラムの運営に

力を入れてきた。その一つがネットワークキング、インタビュー、コミュニケーションスキル、履歴書作成等のテーマを含むワークショップシリーズである。また、(キャリアアドバイザーメントや就職活動における)文化の違いを系統立てて調べるためにフォーカスグループも運営している。

「留学生によく、『とても高いGPA (Grade Point Average: 平均成績値) を持っているのにどうして仕事が見つからないのか?』と聞かれるのですが、(GPAが高くても仕事が見つかるわけではないアメリカでは) どのような文化の違いについて説明しなければなりません。米国において仕事を探そうとする以上はこの国のやり方でやらなければならぬことを理解させると同時にどのように適応していったら良いのかを教えるようにしています。例えば、ネットワークキングが仕事の探し方においては一番大事なものである、など。」

八道は留学生だけでなく、アメリカ人の在学生、卒業生に対してもカウンセリングを行っている。「彼女はとてもキレがよく、才能を持ったカウンセラーです。ここで働きだしてから今まで、オフィスにおいて一番多くのカウンセリングの量をこなしてきました。今、社会はすごい速さでグローバルマーケットになっていきます。そこにおいて、私たちは文化の違う人たちとうまく働いていくことが不可欠になっています。里実のバックグラウンドは他のスタッフが他文化から来ている学生たちの経験や、物の見方を理解し、その違いをありがたく思えるようにしてくれています。」

▲八道さんは、シラーキユース大学当局からも高い評価をうけて活動していましたが、更なる飛躍を求めて二〇〇四年九月よりthe University of Massachusetts Amherstのキャリアサービスマンとして勤務しています。この大学は、少年よ、大志

を抱け” という言葉を残したクラーク博士が三代目の学長を務めたことでも知られていません。

八道さんの話しによると、NorthamptonのAmherst周辺はとてもどかでありながら文化と歴史のある所で、秋は紅葉の名所であり、各地から人が集まってくるそうです。その関係か日本語学科があったり、北大を始め、日本のいくつかの大学から交換留学生が集まっているようです。▼

▲ ▼は編集委員会による。



古希を迎えて（直前を含めて）の俳句

（戯れ句）と短歌（戯れ歌）

外国語学部教授

國松 昭

國松の翁の詠める

二〇〇四年四月

あと一分あと一秒で古希なるか
めでたさも下の方なり古希迎え
誕生日古希ともなればうら寂し
六十路とはかなりな違い古希以後は
誕生日自分も祝うは四十まで
古希迎え過ぎにし年をほろ苦く
古希なりし酒も煙草も変わらねど
これからは年寄りという自覚持ち
老残の身ということを言い聞かせ
古希なれどせめて最後の恋したし

古希なりきついに来たりし古希なりき 一昔前ならとうにおさらば
六十代かなりのじじいと思えども 古希に比べりや若く思える
今はただ玉きはる命見据えしも せめてもの花密かに夢む
様々のこと思い出す桜かな 古希ともなればまさにそうなり
立ち止まり振り返り見れど我が歩み さしたることもないままに過ぐ
古希前にあの世に行きしともがらを 指折り数えたため息をつく
生涯を辿れば概して寂しきも 小さな花もいくつかはありし

古稀をお迎えになった國松先生に題す

外国語学部教授

中村 信幸

緑雨瀟瀟鎖杏林 lǜ yǔ xiāo xiāo suǒ xìng lín
紫煙循屋萬書侵 zǐ yān xún wū wàn shū qīn
古稀碩學懷故友 gǔ xī shuò xué huái gù yǒu
一片春心帶醉吟 yī piàn chūn xīn dài zuì yín

緑雨 ^{しょうしょう}瀟瀟として 杏林^{とぎ}を鎖し
紫煙^{しえん} 屋^{おく}を循^{めぐ}りて 萬書^{ばんしょ}を侵^{おか}す
古稀^{こき}の碩學^{せきがく} 故^なき友^{おも}を懷う
一片^{いっぺん}の春心^{しゅんしん} 酔^よいを帯び^{ぎん}て吟ず

新緑の雨が杏林のキャンパスにたちこめている。

愛煙家の先生の研究室には今日も煙が漂い、書架いっぱいの書籍に染み込んでいくほどだ。

めでたく古稀をお迎えになった先生は、すでに亡き友人を指折り数えては、ため息をついておられる。

しかし、恋への憧れの気持ちも今なおチョットとおありで、お酒を召し上がりながら、そんな歌をお作りになったりもする。

(注、先生がお酒を召し上がるのは研究室でではありません)

＜平成16年度 外国語学部学年暦＞

〔春学期〕

平成16年 4月4日(日)	4月入学式(三鷹キャンパス)
4月5日(月)	オリエンテーション、健康診断
4月6日(火)	オリエンテーション、健康診断
4月9日(金)	オリエンテーション、健康診断
4月12日(月)	授業開始日
4月19日(月)	履修登録(1・2・7・8セメスター生)
4月20日(火)	履修登録(3・4・5・6セメスター生)
4月30日(金)～5月1日(土)	ゴールデンウィーク臨時休暇
7月10日(土)	授業最終日
7月12日(月)～7月14日(水)	補講期間
7月15日(木)～7月31日(土)	定期試験期間
8月1日(日)～9月29日(水)	夏季休暇
8月25日(月)～8月31日(火)	追・再試験期間
9月24日(金)	9月卒業式(三鷹キャンパス)
9月30日(木)	秋学期オリエンテーション(在学生)

〔秋学期〕

平成16年10月1日(金)	10月入学式(八王子キャンパス) オリエンテーション(新入学生)
10月4日(月)	授業開始日
10月12日(火)	履修登録(1・2・7・8セメスター生)
10月13日(水)	履修登録(3・4・5・6セメスター生)
10月30日(土), 31日(日)	杏園祭 杏園祭前後日休講(29日・1日)
11月11日(木)	創立記念日
12月22日(水)	年内授業最終日
平成17年 1月6日(木)	授業再開日
1月12日(水)	授業最終日
1月13日(木)～1月15日(土)	補講期間
1月17日(月)～1月31日(月)	定期試験期間
2月17日(木)～2月22日(火)	追・再試験期間
3月18日(金)	3月卒業式(八王子キャンパス)

4月27日朝、滝本道生先生の訃に接し、八王子キャンパスは悲しみに包まれました。先生の亡骸はその日の午後、晴れた中庭に最後の登校をされ、多くの教職員、学生たちはただただ涙でお見送りするよりほかなかったのです。JEC 創刊以来、本号は初めての特集号となりました。巻頭に滝本先生のお写真を載せたり、各方面の方々の弔辞を載せたりと、異例づくめとなりましたが、現職の学部長が亡くなられたということで、普段とだいぶ趣きが違ってしまったことも了とされたいと存じます。巻末には今年古希をお迎えになられた國松 昭先生の寿のお祝い申し上げるため、先生ご自身のお作である俳句と短歌、また、中村信幸先生の漢詩を載せました。決して悲しいことばかりではないのです。私たちは滝本先生のご冥福をお祈り申し上げるとともに、そのご遺志を継いで、よりよい外国語学部にしてゆきたいと切に願ってやみません。

(渡辺・詹)

第14期生のご父母の皆様へ

平成16年度卒業記念パーティのお知らせ

日時：平成17年3月18日(金) 午後5時 開宴予定
(卒業式当日)

会場：京王プラザホテル八王子 Tel 0426(56)6700

☆ご父母の皆様のご参加を心よりお待ちしております
(無料)

J E C 第17号

発行年月日 平成16年11月20日

編集発行人 杏林大学外国語学部杏会
〒192-8508

東京都八王子市宮下町476

電話0426-91-8224

印刷所 株式会社 朝 陽 会
〒114-0003

東京都北区豊島 4-2-4

電話03-3913-5528



杏林大学外国語学部杏会

杏林大学公式ホームページURL <http://www.kyorin-u.ac.jp>

〒192-8508 東京都八王子市宮下町476番地

緯0426 (91) 8224